
その先に

Sorairo 光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その先に

【Nコード】

N3365I

【作者名】

Sorairo 光

【あらすじ】

おてんば娘で王位継承者第一位の王族の姫、ファアラ。彼女は自分なりの生き方を王族という地位を関係なしに生み出していた。

そんな彼女だったが、無理やり他国に潜入させられることになってしまふ。

しかもそれは、ファアラが最も嫌う“王族で姫だから”という理由で顔も知らない王子のもとへ嫁がなくてはならなくなった。

そんな姫がどのようにして変わっていくのか……。

自由奔放（前書き）

この小説は私が書いている『記憶』という小説につながっています。

自由奔放

大自然に囲まれた島、ユリア。

古代から残された自然の数々は、様々な文明をそれぞれに築き上げ、この地形を保っている。

「カリア！カリア！？おい！見てみるよ！今日はアナカンダスから船が来ている！」

「姫さま！いけません！崖は危ないし、そのような言葉遣いをするなど……王様に怒られてしまいます！こちらにお戻りを！」

「カリア！私を姫さまと呼ぶのはやめろ！」

「ですが！」

「私はファアラ。ファアラ・ディボルタンだぞ！」

多々の世界から孤立した島国、ユリア。

現在国王はディボルタン一族、タミノイ王。

王（男の場合）は正妻を一人と他の女性をたくさん向かえるという一夫多妻制度である。

そして正妻の一番最初にできた子供、ファアラ。

ファアラこそこの小説の主人公である。

ちなみにこの国に男尊女卑はない。

国の王は国の民たちが選び、人気のある王族の血筋から決まる。

時には女王が王のときがあるが、万が一を考え、王族の血筋が途絶えぬように一夫多妻制度がとられている。

そして今、正妻から生まれた血筋が、長女、ファアラであり、長男であり弟のセタルである。

他は約20人ほどの王の血を引く子供たちがいる。

さらに民たちも子供を生むため、別名“こどもの国”である。

王達はファアラの弟、セタルを次の王座に君臨させたいらしい。

何故ならファアラはお転婆すぎるからだ。

だが、そんなファアラだからこそ民達は彼女を好いている。

「おはよう！マチルダ！」

「姫さま、これはこれはおはようございます。」

「マチルダまで私を姫さまと呼ぶ……。キャリアにもやめると言ったのに……。」

「いけませんよ姫さま。姫さまは姫さまなのですから。」

マチルダと呼ばれた女性は少し小太りした体付きで、にこりと微笑んだ。

「マチルダ！私はフアーラだ！」

「マチルダさん！姫さまを……。フアーラ様を見ませんでしたか！？」

ほぼ同時に聞こえた声。

「げっ！キャリア！」

「キャリア……。姫さまはここにいますよ。」

「マチルダ！」

先ほど、キャリアを巻いてフアーラは逃げてきたばかりだった。

「捕まえましたよ姫さま！」

フアーラと年の差はなんら変わらぬまだ少女が残る顔でキャリアはフアーラをおいつめながら言った。

「バカだなあ……。キャリアは。実際に捕まえなければ私を捕まえたことにはならないぞ！」

木の間に二人で行き交いする。

「姫さま！そんな格好をしないでください！それに王が姫さまとお話したいと言っておられます！」

そんな格好というのはぼろ布のような布をまとっているフアーラにとって一番動きやすい格好だった。

「別に私が何を着ようと勝手だろう！？」

「王様がお話したいと言っておられます！」
その瞬間。

「捕まえた。」

のんきな声が響き、フアーラはほぼ叫んだ。

「マチルダ！」

「姫さま！」

カリアが木陰からファアラを見つけたとき、マチルダがにこりと笑い、カリアに差し出した。

「何をするんだ！こら！離せ！マチルダの裏切り者お！」

カリアにしつかりと掴まれながらカリアが傷つかない程度に暴れ、マチルダにむかい、叫んだ。

「姫様！」

カリアの声はほぼ発狂だった。

いくらカリアが傷つかないように力を制限しているとしても、それを押さえ込み、さらには引つ張っていこうとするのだからカリアにはかなりの負荷が掛かっていて、とてもつらい状態なのだ。

マチルダはにこやかな表情のままそんな二人を手を振って見えなくなるまで見送った。

城内に入ると、ファアラは観念し、カリアの言うことを聞いた。

「さあ姫さま。ここからは私が先を歩いてはなりません。次期王位にあたる王位継承者の方は自分の力で前に進まねばなりませんからね。」

「家訓などどうでもいい。私は王にはならない。父様も母様も私が王になることは望まれていないのだ。次期王はセタルだ。」

むくれながらファアラはすこしそっぽを向いた。

「いいえ、王位は民から決まります。民は皆セタル王子にはすこし申し訳ありませんが・・・ファアラ様に王位を譲るべきだと考えておりますし、私もその一存ですわ。」

「なぜ私なのだ！私は家訓も守らず自由奔放で王には不向きな子なのだろう！？父様が言っていた！母様だつて！」

ファアラが不満をぶつけると、カリアは笑いだした。

「何がおかしい・・・。」

「いいえ。いいえ、姫さま。それらをあなたからとつたらそれは姫さまではなくなってしまう。特に着飾らず、明るくて優しい姫

さまだからこそ民に人気があり、次期王には姫さまが選ばれるべきなのです。」

「なぜ私が優しいといえるんだ。私は毎日キャリアを困らせているではないか。」

するとキャリアは大げさに驚いた。

「まあ、迷惑をかけているとわかっていらしたとは……でも姫さま、見てください。今までに姫さまに付けられた傷は今までに一度、この肩のそれも姫さまが四歳の頃のしかございません。」

そう、四歳の頃、姫さまと呼ばれ、落ち着くようにと城内に閉じ込められていた頃、私は不満を大爆発させ、はさみを持ち、誰も近付けぬように振り回していた。

はさみで何をしたかったのか……父様や母様に不満をぶつけたかったのか……今となってはわからない。

私は泣き叫びながらはさみを振り回していた気がする。

どうして私自身に傷が付かなかったのか分からないくらいデタラメにはさみを振り回していたと思う。

だから誰一人近づこうとしなかったし、近付けなかった。

そう……そんな私を止めたのは……キャリアだった。

過去と命令

く過去。

「やあだあー！！！！うああああああん！！！」

「きゃあああー！！姫さま！止めてください！！！」

いろんな叫び声を揚げ、皆私から遠ざかっていく。

「やあだあー！！！！もおやあだあー！！！！！」

「姫様！およろしく下さい！」

そういいながら体当たりのように私を抱き締めたのがカリアだった。私には分からないくらい一歳二歳くらいしかかわらない女の子があんなに大人びて見えた瞬間だった。

怯んだ私はそのままはさみが勢い余り、そのままカリアの肩の辺りにあたった。

「つう・・・・・・・・・・！」

声にならない悲鳴をあげた。

体がびくりとふるえ、カリアはファアラから離れた。

「カ・・・・・・・・カリア？」

カリアの首辺りから血があふれだしている。

その光景を見て私はまた泣き出した。

でもカリアは違った。

首下を手で押さえながらにこりと笑った。

「・・・・・・・・よかった。姫さまが無事で。」

痛くない分けない。

なのに自分とそんなに差が無い女の子は・・・・・・・・自分の友達は自分より私を優先し、自分の感情を自制した。

怒ることだってできた。

痛さで泣き喚くことだって。

その後、カリアは父様に私のことを言い、私を城外に出せるよう説得した。

だから、今の私がいるのはキャリアのおかげだ。
キャリアには感謝している。

「ただ、キャリアは時々自分の感情を痛々しくくらい押さえ付けることがあるから……私をそれでもなお上に持ち上げようとするから、そういうキャリアは……嫌いだ。」

「弱さを見せようとするんじゃないキャリアが……私がもしこの国の姫でも王位継承者でもなければ、ただの幼なじみとしてキャリアにそこまで無理させなくてもよかったのだろうか。」

「いつの間にか自分の部屋の前にたっていた。」

「姫さま。」

「はつとする。」

「なんだ？」

「あ、ああ。わかった。」

長いシャツのようなものを来て、さらにその上から着込み、髪の毛をとかした。

「髪は両端で二本、細く三つ編みを作り後ろ髪を出す。」

「姫さま、何を考えていらっしゃるのですか？」

「あ？」

「姫さま、まさかとは思いますが……この格好のまま逃亡しないでくださいね。」

「突拍子もないことを言われ、ファーストは噴出しそうになった。」

「な、何を言うか！」

「だって……今日の姫さま、妙に大人しいんですもの。」

「キャリアは本気で逃げる方の心配をしていた。」

「にげやしないさ。元々互いに好いてはいないが親だからな。致し方ないのさ……私は窮屈なことは嫌いだ、親も嫌ってしまつと住む場所がなくなってしまう……何だかんだ言っても私は無力なんだ。だから、王位継承者だとか次期王なんてどうでもいいんだ。むしろ、現国王に好かれているセタルこそ王になるべ

きじゃないかと私は思うんだけどな。」

「姫さま……。」

「な、なんだよ。」

「そんなこと思ってたんですね。」

「私は王宮にいると孤立していくからな。ま、そんな話はどうでもいい。用意はできたな？行くぞ！」

ファアラはいきなり席を立ち上がり、王宮の間まできびきびと歩きだした。

窮屈な服も、家訓も、礼儀も……全部嫌いだ。

だけど私は生まれてきた。生まれてきてしまったんだ。

王と王女の第一子として。

血筋はどうあがいてもかえられないだろう。

これが……定めという奴なのだろうか。

まあいい。今はそれより何故父様が私を王宮の間に呼んだのかを考えよう。

王宮の間の大扉を叩く。

カツン、コツン。

斑まだひな音が指と扉から聞こえてくる。

扉が開くと、護兵が立っていた。

「これはこれは。姫さま、王宮の間にいらっしゃるとはめずらしいですね。」

「ああ。父様から呼び出された。そこを通してもらえるか？」

「どうぞどうぞこの国の姫さまとあれば。」

ずっと護兵は身を退き、簡単に中へと入っていった。

王座に腰掛けている王と王女の前へ行き、ほぼ仁王立ち状態でファ

アラは話し掛けた。

「これはこれは、父様、母様、ごきげんうるわしゅう。ご丁寧に王宮の間へおよびいただきましたが、改まって何事にございませうか？」

今までよりワントーンからツートーン低い声が王宮に響く。

「そう構えるな。私達はそれなりに元気だよ。それで……話というのだがな……実は……タイターナへ行ってほしい。」

姉弟

「タイターナは……貿易国だな……どういことだ？なぜ私が行かなければならない！」

そこへカリアが出てきた。

「失礼ながら王様！どういことですか！民達は皆、姫様が次期王になることを望んでおります！今の言い方ですと、姫さまを厄介払いしたいようにしか聞こえません！」

すると、王は悲しく微笑んだ。

「私も厄介払いしたいわけではないんだよ。これでも実の子……可愛いには可愛いのだ。そしてファアラ、お前の持ち前の明るさを使ったらタイターナへ行くのも簡単だろう。最近我が国にタイターナがあまり来ていないことをファアラなら知っているね？」

「ああ……そう言えば今日来たのもタイターナではなくアナガンダス貿易船だったな……」

「タイターナは今、とてつもない力を発揮していて、とてつもない膨大な国になったらいいのだが、もう他国を近付けないのだよ。だから現国王である私を近付けてはくれなかった。国に入ることはおるか、近づくことさえだ！」

「だから……まだ父様より弱い権力の私を……タイターナへ嫁がせると言うのか。」

ファアラは国王を睨み付けていた。

「嫁がなくてもいいだろう。ただし、タイターナにはユリアを捨てたということにしてからのどん底生活が始まる。」

「そんなのいやだ！私はユリアのことは好きだ！みんな、この自然も、ここの人たちも！全てだ！私は王位なんかいらない！」

すると今まで黙っていた王妃が口を開いた。

「そういふと思いましたよ。ファアラ。まだ相手を愛するということとを知らないあなたを嫁がせたくはありませんが、これ以外に方法

はないのです。わかってください。」

「母様……では聞くが、何故セタルではなく私なのだ？やはり私を国から追いやってセタルを次期王に継がせるためではないのか？」

「どこまで私達は信用がないのでしょうかね。」

王妃はふうつとため息をもらした。

「私はこの目で、この耳で真実を知った。貴方達は私を王にはした
がらなかった。そのかわり、セタルを溺愛できあいし続けた。結果、可愛い
セタルに跡継ぎをさせたくなった……そうだろう！」

途中からファアラの声はふるえ、最初の迫力ある声は徐々にかき消
されていく。

最後には涙目になりながらファアラは王達を睨み付けていた。

腕に抱かれているセタルをファアラはセタルが6や7歳になってセ
タルが母親を自ら振り切るまで何度も何度も見た。

セタルが憎いわけではなかった。

何もできないのだから仕方ないと自分に言い聞かせていた。

そう思うことで何もできないセタルを一人の人間として嘲笑ってい
た。

自分は三歳からの記憶しか無いが、もうその頃には抱かれていた記
憶がなかった。

1人でたち歩き、城内の兵士や女中たちと遊んでいた。

そんな中、出会ったのはカリアだった。

一番歳が近く、何より気が合った。

お互いの間に身分差はまだなかった。

叫んで怒って喧嘩して。

同等な子供として一緒にいるはずだった。

でもカリアが五歳辺りになると、カリアは自分を押さえ付けるよう
になった。

それが五歳児にとってどれだけ辛いことだっただろう……。
そしてそれを私は寂しく感じていた。

誰よりも近いと信じていたから……。

そんな中、城内に閉じ込められ、不満は爆発した。

私は実の母親に弟のように愛されなかった。

そして父親でさえ、娘を見ることはあまりなかった。

私には関心がなかったのだ。

でも私はその分国の人たちから愛され育った。

だからこの国が好きだし、親をあまり憎まずにいられる。

その私が厄介払いしたいようにしか見えない扱いを受けている。

「どこまで母様は私を傷つけねばすむんだ。どこまで父様は私を踏

み躪じればすむんだ！ ついにはこの国を出てけと！ 一体貴方達は私を

どこまで苦しめれば気が済むんだ……。」

「ファアラ、落ち着いてください。厄介払いしたいわけではありません。

せん。タイターナには男尊女卑のような特殊な制度があるのです。

ですから王は必ず男ではなければならぬ決まりがあります。必ず

しも皆、ユリアのような国ばかりではないのですよ。ですからセタ

ルは国には近付けてはくれないのです。あの国へ行くには最低でも

条件が二つ。国王ではなく、尚且つ女であること。ちなみに次期王

がファアラ、あなたと歳が近いのです。ちょうど送り込むにはいい

相手となるでしょう。」

「母様！！」

「まずはその言動すべてを直さなければなりません！ しばらくはレ

ッスンを受けていただきますよ！ カリア、あなたはファアラを見張

っていてください。」

カリアもファアラも納得せぬまま王宮の間を締め出された。

締め出された先には弟のセタルが腕組をして立っていた。

セタルはすでにファアラの背を越していてファアラは見下される形

となった。

セタルは壁に寄り掛かっている。

「……セタル。」

「セタル王子……。」

フアーラと一緒に出てきたカリアがセタルにお辞儀をする。

セタルはそんな二人を見るなり嘲笑った。

「フツ。いいきみですよ姉様。親の愛も王座も、民の愛も全てを受け取れると思わないでくださいよ。」

フアーラは眉をしかめた。

「どういうことだ？王達の溺愛はおまえが受けたのだろう？それに私は王位などいらぬ。」

「そういうところがムカつくって言うてるんだよ！」

セタルの怒鳴り声に強気に出たフアーラも体をすくめた。

「父様だつて母様だつて姉様を心配なさつてましたよ！姉様は手のかからない子だと！そして姉様は本当に何でもできた。民に愛され、王座を得ることさえたやすかった。なのに姉様は王位などいらぬと言った。屈辱だよ。わかるか？何もかも手に入れることの姉様と違つて僕は！姉様のお下がりで王位にされるところだつたんだ！そんなの僕の実力じゃない！僕だつて王なんかどうでもいいんだ！姉様は何でも手に入れていくのに僕は姉様のおさがりか！？ふざけるな！」

「セタル・・・・・・・・。」

「セタル王子！それはあんまりです！姫さまだつて・・・・・・・・！」
カリアの前に手を出した。

カリアはびっくりしてフアーラを見るが、フアーラはそれ以上しゃべるなと首を振つてカリアを制した。

「・・・・・・・・申し訳ありませんでした。姫さま。」

納得の行かなさそうな顔でカリアは後ろに引き下がった。

「私のお下がり嫌なら・・・・・・・・何故私より先に生まれてこなかった！私だつて母様の腕に抱かれてみたいと願う幼い時期だつてあつた！だがいい、そんなに私が何でもできると思うならお前も終わったな。そんなひがみばいのはこの国の王になるのは難しいぞ。王は民から決まるのだからな！」

「姫さま！そのような言い方ですとあまりにも！」

カリアが止めに入ったがそれもむなしくかき消されてしまった。

「カリア！行くぞ！」

「はい……」

早足でセタルの前を通り過ぎるファアラをカリアは小走りに着いていき、セタルの前に行くと、微かにお辞儀をした。

「失礼します。」と呟いて。

セタルは頭を鷲掴みにした。

「どうして……姉様ばかりいいところなんだよ……」

セタルもそれなりの美貌を持ち合わせていたが、ファアラは何故か全体バランスが整っていた。

セタルもファアラをひがみ、眉間にしわなど寄せていなければ美貌はファアラにも別に負けはしないことを知らない。

ちなみにファアラは活動的なので骨格のバランスに引き締まった筋肉が付いているだけだ。

セタルは城からあまり出ずに家訓を守ってばかりいたのでそれなりの筋肉はあるものの、貧弱そうに見えるのだった。

自分の部屋に戻ったファアラはしばらくポーツとしていた。

「あの……姫さま、お召しかえを……」

カリアがファアラに声をかける。

「ああ、そうだな。正装はどうも苦しくてダメだ。」

そういいながら着替えはじめ。

「姫さま、先ほどの言い方ですとあまりにも姫さまが悪人になってしまいます。」

すると、ファアラはフツと笑った。

「カリア……聞いたか？セタルは私のお下がりですべてを手に行っているのだと言ったよ。あいつにはあいつのいいところがあるのに、どうして私と比べたのだろうか。やはり王位継承者だからだろうか。」

「だからってあのように姫さまが自ら悪人になるようなことを言わ

なくても……。」

「カリア……知っているか？ずっと城内に閉じ込められていい子をやっていると……ストレスがたまるのだ。きっとセタルには私以外そういう感情をぶつけられる相手がいなかったのだろうな。私にはカリアがいるが、セタルにはいない。それはつまり孤独を示しているのではないかと私は思うんだ。さっきはついつい感情的に言いすぎてしまったが、これでいいのだよ。きっと……。」

そう言ってファースはフツと遠くを見た。

再会

私たち姉弟がお互いに……羨ましがっていたとはな。

「姫さま……。」

着替えおわったファースラはカリアに再び言った。

「姫さまも敬語もやめろ！」

「いけません姫さま！」

「二人しかいないときなら問題なかるう！」

「ですが！」

カリアが何かかえそうと口を開くと扉がたたかれた。

「……誰だ。」

「教育がかりの者です。今日からファースラ姫に配属されました。カリアがそつと扉を開ける。」

そこにはそこそこに年を取ったおばさんちつくな女性がいた。

「見たことない顔だな……国籍はユリアか？今までどこにいた？」

「国籍はカルザンノにございます。今まではアナガンダス、タイターナ、マイナルなどの国々の王宮専属教育がかりをしておりました。」

「マイナルはユリアとの交友関係にある国ではないか。」

「はい、ファースラ姫さま、その通りでございます。」

「なるほどな。タイターナへ行って国が変わってからマイナルへと移転し、我が国と交友関係にあったマイナルとの連絡から私の礼儀作法がかりになれと……父様も考えたな。タイターナへ行った者なら、タイターナの礼儀も知ることができると考えたか。」

「ぴくりと教育がかりの女性の肩眉が上がった。」

「そうですか。姫さまは頭がよろしいようで。それはよかった。鍛えがいがあるというものですな。」

「ゲツという顔をファースラはした。」

「一日中付きつきりで教えるようにと王様のお命じでしたのでこちらの女中の方にも頑張っていたいただきますよ。」

「女中じゃないよ。私の親友のカリアだ。」

また女性の肩眉が上がった。

「なるほど、次期王第一希望者だけある。その性格だから民に親しまれたわけですね？ですが、今のタイターナはそんなに甘くはありませんよ。さあレッスンスタートです！」

それからだいぶしごかれた。

タイターナの洋服、ドレスの着方やマナー、言葉遣いなど、怒られ続けた。

「そうではなく、こう、静かに歩くのです！」

「は、はい。ダリアさん。」

ファアラは今まで着たこともない服を着、履いたこともない靴を履いて、使ったこともない言葉を使った。

「もう少しなめらかに発音してください！」

ファアラの髪の毛は今までにないくらい何度も櫛くしを通し、今までクセっぽく所々はねていた髪の毛は全く跳ねなくなり、髪の毛を梳いた分、髪の毛が肩に掛かるくらいまで長くなった。

「これからは髪の毛をのばしていただきますからね！これじゃあ髪の毛を巻けやしない！」

教育がかりになったダリアはプリプリしながら怒っていた。

カリアは目を輝かせていた。

「カリア、何が楽しいんだお前は……………」

「だって姫さま、あまりにもお美しいんですもの！まるでお人形みたい！」

「嬉しくないな……………私は外で駆け回っていたいよ。」

ドレスを着、化粧をし、着飾ったファアラは意外にも美しく変貌を遂げた。

「ファアラ姫！」

ダリアが怒った。

「はいはい。でもこれでぶっ続けだ。少しは休憩させてくれよ。」

「なりません！タイターナでは休憩などないのですよ！今回、指導期間はかなり短い！付けやきばでもいいからタイターナとユリアの礼儀作法を教え込めとの王のお命じなのです！姫さまは女性なのですからタイターナへ行ったらくれぐれもお淑やかに！言葉遣い正しくしていただかなければなりません！」

「こんな動きづらい格好で自分を偽って生きるなどごめんだな。」

そういつて窓まで近づくといきなり窓枠をまたいで外に飛び出した。

「姫さま！」

カリアとダリアの声はほぼ発狂だった。

地面に着地したとき、ファアラは舌打ちした。

「チツ！この靴で飛び降りたのが悪かったか。」

ファアラの足首は少し傷んでいた。

だがすぐ立ち上がり、上を見上げた。

「少し息抜きしてくるだけだよ！」

そういつと走り出した。

「走りづらいな！」

よいしょよいしょとドレスを引きずって海側へ出た。

崖の上に立ち、海を見渡していた。

「誰だおまえ。」

「その声は……ナハス！」

そういつてファアラは振り向いた。

「その声と喋り方は……んなあほな……ファアラ

か？」

ファアラはドレスを引きずりながら青年の元へ駆け寄った。

「ナハス！久しぶりだな！そうだ！私だ！ファアラだ！」

「おまえ、なんちゆう格好だよ。」

「……ああこれか？少し事情があつてな。動きづらいんだ。

これ。」

「へえ、で逃げ出してきたわけだ？」

「ああ！そうだ！」

ナハスと呼ばれた青年はファールを見渡した。

「こうしてるとおまえはやっぱりお姫様なんだな。振り返ったとき声さえなけりや俺にも運が回ってきたのかと思ったのに中身はファールだもんなあ。」

大袈裟に肩を沈める。

「な！ばかやろう！悪かったな！相手が私で！」

しばらく黙り込んでから二人は顔を見合わせ笑った。

赤面

「でも本当、久しぶりだな。ナハス。私と始めてあったときは私も小さくてガキ大将で、その上まだ互いに4〜5歳だった！」

「お前より背が低いとかどんだけ昔の話してんだよ。」

ナハスはフアーラの頭一個分背が高くなっていた。

フアーラは首を傾げた。

フアーラは今回、成り行き上ヒールをはいていて普段より確実に背が高いはずなのだが、それでも頭一個分の差がある。

「おま、また伸びたのか！」

「ああ、お前とは最後にあつてから2年経つしな。それにお前がいとときくと親父が血相変えるからあえても今まで一年に一度くらいになつたし。ここ最近じゃお前の行きそうなところも街に来そうな時期まで警戒しだしたんだ。」

「それは……ひどいな。私はナハスに会いたかったのに会えなかったのはそういう理由か……。」

「俺がお前が異性ではなく同性ならばよかつたのだろうか……。」

「仕方ないだろ？ 私達は異性なんだ。でも私はナハスだったら安心できると思うんだけど……。」

「それはどういうことだ？俺を男として見てないってことか？」

「いや、ナハスは男だけど……なんか笑っちゃうな！前は私より弱くて頼りなかつたよな！」

そっぴいなながら崖を降りていくと痛めた足に少し無理が出たか足首をひねり、バランスを崩した。

「うあ！」

パフッとナハスにぶつかった。

「大丈夫かよ？」

「あ、ああ、悪いな。」

「ここ崖だぞ？一メートルくらいの高さだけどその格好じゃ飛び降りんのつらいだろ。」

そういうと先にナハスは飛び降りて受けとめるから落ちてこいと言った。

「ば……ばかいうな！この格好だつて私は平気だ！」

といいつつ、ヒールでバランスを崩し、落下。

「っ！あ……ナハス……大丈夫……!?」

いきなり引っ張られ木に押しあてられた。

「な！何するんだ！離せ！」

振りほどこうとして失敗した手がいとも簡単に離れた。

「俺だつて男だよ。“姫様”」

その瞬間にファアラの表情は固まってしまった。

「おまえのこと……信じてたのに……」

手首を押さえながらファアラは言った。

「……男として見てもらえないって言われたら……仕方ないだろ……」

後ろを向いて唇を噛みしめ、小声でつぶやくナハス。

「信じてたのに……！おまえだけは……ナハスだ

けは私を姫様呼ばわりしないって！」

あまりにも予想していた言葉と違ったナハスはただ驚くことしかできなかつた。

「は？」

「おまえだけは私を同等のただの人間として扱ってくれるって……信じてたのに……私はやはり王位継承者だから！くそ！仲間ができて……みんな私から離れてくんだ！どうして……」

本気でそのことを嘆いているファアラを見てナハスは笑った。

「ぶっ……本当、おまえには適わないよ！」

「何……笑ってるんだ。」

ファアラは軽くナハスを睨んだ。

「いやいや……お前は今までこれからも姫様だし、それはいつまでも変わらない。つまりな？姫様と呼んだからって今までと何かかわるってわけじゃないんだよ。」

「……本当か！本当だな！」

「あつとファアラの表情に笑顔が戻ってくる。」

「ああ……むしろあんたが王位継承者でなければと俺も思うよ。」

「なんだ。どういうことだ？王位継承者ではなければユリアの平民達か？それもそれなりによさそうだな！……私もタイターナに渡る定めなどくだされなかつただろうしな……。」

「なんだ？なんか言つたか？」

「いや、なんでもない。しかしお前、でかくなつたよな！私も平民に生まれたかつた……平民は城よりずっと自由で暖かい。」

「まるでお前やカリアの心のようにな。だけど……城のなかじゃカリア一人じゃ足りないんだ。窒息してしまいそうになる。そんなとき……どうしてもおまえに会いたくなる……。」

「そうだな。マリアもそうだけど……真っ先に浮かんでくるんだ……お前が……ナハスが……。」

「海を真っ直ぐ見つめながら話していた。」

「俺だつて会いたくなくてお前に会つてないわけじゃないぜ？」

「わかつてるさ！そんなこと！」

「そういつて軽い足取りでナハスの前に向かい合うように立つたと思つと、片方の足首をつかみ、しゃがみこんだ。」

「どうした！」

「あ、や、ちよつとひねつたらしくてな。」

「ひねつたじゃねえよ！早く見せる！」

「ファアラの足首はすこし赤くなり、微熱があつた。」

「それだけではない。」

「足を冷やそうと靴を脱がせればそこには沢山の靴擦れの跡があつた。」

「なんだこれ……。」

「今みつちりレッスンを受けていてな。一日中こんな格好をさせられるんだ。」

「ひでえな……。」

ナハスはファアラをお姫様抱っこして砂浜に座らせる。

「お……驚いて声も出なかったぞ……お前、私が重くなかったのか？」

「あー。最近ガキの世話してるとどうも人の重さに慣れてきてな。いい筋トレになるわガキは集団でくるわでおまえより夕チが悪く、さらに重い。」

自分の手で海水をすくいあげて足首にかける。

「ひゃ……あ……。」

驚いたファアラが足を引っ込めようとする。

「こら！ちゃんと冷やしてから移動するからじっとしてる！じゃないと足の傷に海水が触れてかなり痛いことになるぞ！」

「わ、わかった。」

「まったく図太いようで弱いんだから……ひゃあじゃねえよ。」

「……なあナハス……。」

「ん？」

「どうしてこのずっと先には別の国があって競い合ったり別の文化があったりするんだらうな。」

「……なんでだらうな。」

「国が皆ユリアみたいに穏やかならいいのに。」

「さ。行くか！」

いきなりナハスは立ち上がり、ファアラを再びお姫様抱っこをした。

「お、下ろせ！私は歩ける！」

「そんな足で誰が歩かせるかよ。大体これの何が不満だ。ガキたち（特に女の子たち）はこれが気に入ってるぞ。」

「な……何ていうか……その落ち着かないんだ！ファアラの顔は真っ赤だった。」

涙

「お？俺に惚れたか？」

「な、何言ってるんだバカ！おまえの心臓の音、すごく早いぞ！何かの病気か！？」

「違う！病気じゃない！いつものことだから気にするな！」

そういつてスタスタ歩きだした。

顔を真っ赤にして大人しくなってしまったファアラと顔を赤くしたナハス。

それから二人はしばらく黙っていた。

昔よく遊んだ森に入っても。

沈黙を破ったのはナハスだった。

「ちよつと休憩な。」

そういつて木の上にファアラを座らせる。

「お、折れないか？この枝……………」

「折れやしねえだろ。」

「…………腕疲れただろ？貸せ。」

「あ？何する気だ？」

「マッサージしてやる！」

ん！と自分の手を伸ばすファアラ。

「い、いいから！」

「いいから貸せ！」

渋々と腕を差し出すナハス。

「よし。」

そういつて微笑んだファアラ。

「っ！」

ナハスは再び赤面した。

そんなのお構いなしにナハスの腕をとりマッサージをはじめた。少しするとナハスが顔を歪めた。

「いつ……」

「ここか？ここが痛いんだな？」
すると腕をさすりはじめた。

「王つて一応王族の血から決まるんだろ？お爺さんのその前の王の血筋から決まって……同じ年くらいの王を選ぶ……」

「……ああ、そうだ。」

「思ったんだけど……普通に考えて見りや皆、俺だつてわずかに王の血筋引いてるんじゃないかな。だって男は相手を変えてバンバン子供生むわけだろ？もしそいつらが二世代続いてそれでも王になることがなければ一般人になるんだろ？」

「そうかもしれないな。」

「時々思うよ。この国の人たちはお前を王にしたがるけど、お前が王にならなければつて。」

「……私は王にはならないよ、ナハス。」

私は……タイターナへ嫁がなくちゃいけないんだ。

野蛮そうな国になったタイターナへ……でもそんなこと言ったら国中がきつと大変なことになってしまつから……黙つておいたほうがいいのだろう。

「どういうことだ？王は民から決まる。辞退するつてことか？王位継承権を誰かに譲るのか？王位継承者第一位だろ？」

「そうだな……王位継承者第一位の特権を私は王位継承者第二位のセタルに譲るよ。もしくは王位継承者第三位から下になるかもしれないが……私は王にはならない。それは王達も望んでいたことだし、元々城の生活は私には会わないからな！」
ニツと笑う。

「……何か隠してるだろ？」

「なんも。ナハス……そろそろ私は城に戻らないとまずいのだが。」

「……そうだな。」

木から、すたつと飛び下り、足など何事もないように歩きだす。

「おいファアラ！お前、足！」

靴を履いて歩いていくファアラ。

「平気だ！」

本当は平気ではない。

でもナハスといると自分を見透かされてしまう。

何より今まで嘘を着いたことのないナハスにこれ以上隠し事をして嘘を吐くことがつらかった。

「……………ナハス。」

駆け足でファアラのところに来たナハス。

「ん？」

ファアラはナハスの背中に額をつけた。

「なんで私は姫なんだろう……………好きなこともできやしない……………どうして私なんだ……………どうして文化なんて……………血筋なんてあるんだろう……………」

ナハスの背中に顔を埋めた。

「いやになる……………」

そうつぶやいて。

ナハスの心臓が波打っている。

人間が人間であるための生きている証の音……………。

「戻らなくていいのかよ。城に。」

「私はこの国とナハスやカリアがいてくれたらそれだけでいいのに……………後は何も望まないのに……………」

「……………ファアラ……………」

その後、ファアラはナハスからそっと離れ、弱々しく笑った。

「愚痴言っつてわるかったな。」

ガッ！

一瞬何が怒ったのかわからずにいるとどうやらファアラはナハスに抱き締められているらしかった。

「な……………!」

「無理してんじやねえよ！何がそんな苦しいんだよ！」

「や、やめろ！離せ！今すぐ離せ！」

ドンドンっとナハスの体を叩いたり押ししたりするが、なかなか力が入らないのと、全然ナハスはピクリともしなかつた。

「やめろ……やめてくれ……泣いてしまいたくなるから……。」

普段強気なファアラの面影さえなくしていた。

心身共に弱っていた。

両親には邪魔者扱いされ、弟には憎まれた。

私は……何のために生まれたんだ。

「……苦しい……ナハス……お前の優しさ……苦しい……。」

人前で見せたことのないファアラの泣き顔だった。

ギュツと強く腕が絞まるのを感じていた。

「家族全員に嫌われたのだとしても……私はユリアが好きだ……ここを離れたくないのに……。」

次の瞬間、ナハスの顔つきが変わった。

「^{ユリア}国を離れるってどういうことだ！？」

「明後日があれば……すべてがわかる。」

そういつて姫はナハス突き放し、走り去った。

「……どういことだよ……。」

ナハスは取り残されしゃがみこみ、ファアラはいつになく沈んだ顔で城に帰った。

一般人と姫君

王族、しかも時期に王になる王位継承者第一位に頭を下げるとあればそれは城のなかの誰よりも偉く姫の近兵もしくはお供をするかなり身分の高い証となる。

「姫様……。」

ナハスは空を見上げた。

その空には星が輝いていた。

ファアラは心苦しかった。

どうしてこんなに苦しいのかわからない程。

言いたいことも言いたい人にちゃんと伝え、別れを告げてきたというのに……。

そしてナハスは家に入り、ファアラは城に帰った頃、二人は両親に呼ばれた。

ファアラは王宮の間へと足を運んだ。

「おまえに護兵をあげようファアラ。」

ナハスは父親の前に立ち、母親は息子と父の顔を交互に見てから腕を組んだ。

「おまえ……護兵になるか？」

「え？」

同じ時間、二つの言葉……二つの疑問。

「何を……何を考えですか。」

ファアラはぐつとさつきから出かかりそうになる言葉を必死に押さえていた。

「カリアと護兵……今後のおまえの近兵だ。ちよこまか動くには女だけでもいいかもしれないが……まあ身を守るためだ。そのことをタイターナへ伝えたら条件が平民であり、王である私が特別気に入っている人間以外という話しでな。」

「何故それを私に言うのです？私は異国へ流される身……」

私の同意など求める必要はないでしょう。」

「そうだな。まあどちらにしようと思らく護兵は彼で決まるだろうしな……。」

「話はそれだけですか？王。」

「ああ。もう部屋に戻ってよいぞ。ちゃんと明日の朝の出発に備えておけ。」

「はい。」

すつと姫は王の前できびすを返し、去っていった。

何一つ逆らえぬ自分に唇を軽く噛み、心の底で全力で悔しがっていた。

そのころ、混乱する疑問がもうひとつ。

「おい親父……それはどーゆうことだ？」

ナハスは訳がわからなかった。

「おまえはこの国の姫様が好きだろう。」

「はあ!？」

「前々から知っていて近付けぬようにしていたが姫様は今回嫁ぐらしい。いい機会だ姫様を守りながら自分の無力さを知れ。」

そういつてナハスの父親は部屋を出ていった。

「嫁ぐ……?どおゆうことだよ!……ファアラ……」

「……」

「姫様を守るのよ？あたしだって納得いかないわ。どうして姫さまがいかなくちやいけないのか！でもどうやら姫様は国王になる気はないようだし、今回のことに関しても姫様が納得しているわけではないみたい。」

「……ああ……だからどうして私ばかりって……」

「……」

「あんだ、さつきから何言ってるの？」

「なんでもねえよ。」

そして翌朝の明け方……

軽く胸当てなどの鎧を纏い、ナハスはファアラの護兵として待って

いた。

そこへドレスをまとい着飾ったファアラが現れた。

「……………ナハス！？何故おまえがここに……………？」

「俺が護兵に選ばれたんだ。」

「……………そうか……………」

「みんなおまえが行くのを嫌がってる。」

「私も嫌だが……………説得してきた。私は王にはならないし……………それに今回のことに関しては私は嫁ぐためにいくのではなく“調査”するために行くのだと。」

「そうか。」

「ファアラ様……………そろそろお船へ。」

カリアがそろりと顔を出し、ファアラ達を急がせた。

「そうだな。それでは行こう。旅は国の動揺をあまりさそわせないためとはいえ……………両親にも見送られずこんな形で始まるとはな……………」

「ファアラ……………」

ナハスが城の方向を眺めるファアラに手を伸ばすが、ファアラの次の言葉に伸ばした手を止めた。

「ナハス。できればおまえには……………こんな姿を見せたくなかった……………」

親に反発しながら生きてきた人生なのに……………結局親に屈することしかできなかつた私をナハスに見られたくはなかつた……………

ファアラはくりりとナハスの方に向き直ると厳しい顔つきになり、一言「出発！」と言った。

タイターナからの舟漕ぎ達と船にカリアとナハスとファアラの三人がのる。

中心にファアラが座り、その斜め後ろにカリアが、そしてファアラの斜め前にナハスが座った。

「ほう……………野蛮国のじゃじゃ馬姫と聞いていたが……………」

「これはまた見事な……」

上から下までファアラの全身をなめ回すように見る船乗り達。

その顔には服から体が透けているみたいないやらしい笑みが浮かんでいる。

ファアラは黙って目を閉じ、カリアは少しうるたえ、ナハスは船を漕ぎながらもなおファアラを見渡す船乗りを睨み付けた。

「ファ、ファアラ様？」

カリアがファアラの顔色を伺う。

「何ですか？カリア。」

ファアラの声はいたって冷静でみっちりレッスンをこなした結果なのか言葉遣いも自然だった。

「い、いえ。その……ご気分が悪くなりましたら私に言い付けてくださいね。」

「ええ、わかりました。ありがとうございます。カリア。そうです。ナハス。」

「は、はい。」

「あなたに頼みたいことがあるのです。」

「何でしょう？」

ナハスも自分が自然に敬語を使っていることに気が付いた。それほど今のファアラは威厳深く、神秘的なものに見えた。

「タイターナへ近づいたら教えてください。私はそれまでこのまましばらく休んでいることにします。」

「わかりました。」

しばらくの沈黙が続く。

目を閉じ、じっと動かないファアラ。

その姿をナハスはじっととらえていた。

着飾られ、異国の衣裳を纏った姫君ファアラ。

意志は固そうでもそれでも他人を引き付ける何かがある神秘的な人。知ってるんだ。

俺……あなたがずっともっと遠くへ行ってしまうこと。

本当は幼なじみなんかじゃいらなかった。

だけどそれでも俺だけは姫と平民だってなんだって近くに居たかったから幼なじみで我慢してたんだ。

だからあなたのことは知ってるはずだった。

王達の陰口や拗ねる顔……いろんな表情を俺に見せてくれるから少し……勘違いを起こしてみたんだ。

俺には絶対何でも打ち明けてくれると思ってたのに……秘密ごとなんかしないと思ってたのにはあなたは1人でいろんなことを考え込んでた。

だから……あの時俺に初めて涙を見せたんだろ？

1人でなんでも抱え込もうとしたから……初めて俺に見せた泣き顔……それでも抱え込んでいるものを俺に教えようとはしなかった。

本当は……一番近い用で一番遠いのかもしいよな……

……
平民と王座を蹴った姫君とじゃ……

ゆっくり開いた目に映る霧のなかの大陸、タイターナ。

「ついに来てしまったのですね。」

船が大陸に着岸するとファアラ一行は驚くべき光景を目にした。貧困の村や町。

大通りのはずの道に売春をする小さな子供たちの影、大人は男ばかりで酔い潰れていて女たちは服も肌もすべてボロボロだった。

「これは……。」

ナハスが息を呑む。

「これはどういうことです？頂点に立ち、他の国さえ近付けることを許さぬタイターナでしょう？何故国民がこんなにも貧困に喘いでいるのですか？」

ファアラが舟漕ぎ達に聞く。

「私利私欲に溺れ切った王達が税に税を重ねたからだ。」

「そうですね……。」

するとある一人の痩せ細った青年がファアラに石を投げ付けた。

「わっ！」

ファアラが思わず声をあげ、ナハスがファアラの前へ飛び出す。

「また女がきた！異国の女！みんな豪華な服を着て俺たちなんか無視をしてあの城に向かっていく！王がなんだ！貴族がなんだ！いたい俺たちに何してくれたい！」

ナハスが剣を構えたが、ファアラが手をあげ、ナハスを制した。

ファアラはその青年の前に立ち、青年の手を取った。

青年の手は骨と皮しかなく、近くによつてみるとファアラと同じくらしいの背しかなかった。さらに全身が骨のようだった。

「私も来たくて来たわけではなく王の陰謀を暴きに来たのです。月日は要するかもしれませんが……必ず国を正常化させてみせましょう。」

そう……その時こそ私がユリアに帰る日だ。

だが、青年は顔を剃らし、涙ながらにはき捨てた。

「そんなこと言ったってあんたもすぐに俺たちなんか忘れて王宮で

「まあ。ユリアの王族が頭を下げたときはどんな時かご存じありませんの？頭を下げただけでも感心してほしいものです。」

「ほう……ユリアから望んでこちらに来たのにユリアの教えを私に説きますか。」

「もちろんです。私の噂をご存じないようですね。」

「じゃじゃ馬姫のフアーラ。国王達を常に困らせる姫だとか。」

「やっぱり邪魔だったんじゃないか！父様！母様！」

フアーラはうつつむいて唇を少し噛み締めてからすぐに顔をあげ、微笑んだ。

「よくご存じでいらつしやいますね。」

「ですが、その馬姫は国を捨てたと聞きましたか？」

「!? 違う!」

違う捨てたんじゃない！送り込まれたんだ！

私はあの国が好きなのに……国民にも私が国を捨てたと王達は説いているのだろうか……そうだろうか。いちばん厄介にならず落ち着く説だしな……国民は私に絶望しているのかもしれない。

「何が……違うのですかな？違うと答えたらあなたをこれから我が国のスパイと認め、兵士達に見張らせますぞ。」

「私は……スパイではありません。ですが、国を捨てた覚えもありません。確かに私は国の王などではなくこちらに来ました。国を捨てたという不確かな情報も耳にするでしょう。ですが、そのような根も葉もない噂を信じるのはタイターナという大国を納める王としてはいかななものでしょう。」

「口だけは達者ですね。ですが、物言いには気を付けたほうがいい。ここは初日ですから寛大に許して差し上げますよ。」

フアーラ達は部屋を与えられるとつかつかと室内を歩き回った。

「いやみな親子め！何が寛大だ！何が国を捨てただ！ふざけるな！」
イライラして着飾っていた髪飾りなどを取り外し、投げ付けるように机の上に置く。

ファースラはついに自分の洋服にまで手を伸ばしたが、あわててカリアがファースラを止めた。

「姫様！」

「何だ！」

「……だ、男性がいらっしやいます！」

ファースラは一瞬動きを止め、ナハスを見るとすぐ口を開いた。

「問題ないだろう。」

啖呵

ファアラの言い方にカチンときたナハスは言い返した。

「ああ、俺が出てけばな。でも出ていかなと言ったらどうする！」
ナハスはふてぶてしく腕組をしながらファアラを見ていた。

「問題ない。さすがにトイレや風呂までついてこられると厄介だが、そんなに見たきゃそこに居座ってる。」
そういつてファアラはドレスを脱いだ。

本当にいきなり脱ぎだしたのであわててナハスは顔を剃らし、床を見る。

が、ちらりとファアラを見るとドレスの下からまた違う衣装が出てきた。

「ふいー。暑かった。暑いし重いな。」

ファアラは青色の袖や襟の広いふわふわのドレスを着ていた。

ドレスの下から見えていたあのレースのような服だとナハスは納得した。

ミニスカートに太ももあたりまである長いロングブーツさっきまであった髪飾りはすべて外され、髪の毛は緩やかなカーブを描いていた。

「姫様、それは正式には下着にございます!」

「ああ、わかつたわかつた!」

ファアラは部屋にあったチエックのテーブルクロスを三角になるように折り畳んでから腰に巻き付けた。

すべてがちぐはぐなのになんかすべてで成り立っていた。

「これでどうだ!」

「テーブルクロスを……」

カリアは呆れて物も言えないらしかった。

ナハスはさっきまで怒っていたことを忘れ、クスリと笑った。

「何笑ってるんだ。」

いきなりファアラの顔と体が近づくと。

「や、おまえらしいなと。」

ファアラと目を合わせたとき、ドキリとして目を逸らす。

「おいこら。なぜ逃げる。」

さらにファアラがナハスの顔を覗き込もうと追い掛け、体はほぼ密着状態にあった。

「ひ、姫様！」

ナハスに救いの手がかかった。

「なんだ？」

「そのような格好はしてはいけません！ひ、姫様が……姫様が異性を襲っているようにしか見えません！」

「何！？カリヤから見ると私がナハスを襲っているように見えるのか！」

ファアラは目を真ん丸に見開いてからお腹を抱え、ゲラゲラと笑い出した。

「傑作だな！女が男を襲うか！しかも私が？ナハスを！」

ひとしきり笑ったところでまだいきを乱れさせながらファアラは言った。

「まあ？確かにナハスは幼なじみだからな。私から襲わないと女としては見てもらえないかもしれないが……だが……」

「またそういつてクククツと笑い出した。」

「笑いすぎだろ。」

ナハスがジロリとファアラを睨み付ける。

「わ、悪いな……だ、だが……」

ツポにはまったらしく苦しそうに息を切らしながらもなお笑っていた。

ナハスはファアラを片手で押し、ベッドの上に倒すと一言冷たい感じに言い放った。

「逆だろ。お前が俺を男だと思ってない。」

するとファアラの目は輝きだした。

「ナハス！このベッド気持ちいいぞ！」

ガバツと起き上がり、ファアラはカリアとナハスを巻き添えにしてベッドに押し倒した。

「キヤア！」

「うわ！」

「あはは！」

しばらくしたが、ファアラが動かないので二人は起き上がれずじまつた。

「ひ、姫様？」

カリアが声をかけるとファアラは二人を抱き締めるようにして腕に力を入れた。

「よかつた……お前たちが一緒にいてくれて。」

そうつぶやいて二人から離れた。

ファアラは二人を残し、ベランダというか、庭？に出た。

辺りは薄暗かった。

カリアはナハスを見るなり微かに微笑んだ。

「あなたも大変ね。」

「……何が？」

「姫様が好きなのでしょう？でも、ほら……姫様はあの通りだから。私も姫様のことは好きなの。だけど……鈍いよ。うで鋭いから気を付けなきゃ。もちろん好きって言うのはあなたとは違う感情だけれど。それに、片思いのつらさは……私も良くわかる。」

「はあ……鋭いかな？俺男じゃないのかも。少なくともあのじゃじゃ馬姫にとっては。」

「カリア！ナハス！こつちへこい！」

いきなりファアラが二人を呼んだ。

「はい。」

二人がファアラのもとへよる。

「あんまり大きな声では言えないが……この国はシステムがおかしい。何故平民があんなに貧困に喘いでいて国王が成り立つ？あんなに国が荒れていてはとれる税もとれぬはずだ。それで何故国王があんなに豊かでいられるのか？不思議だとは思わないか？」

「言われてみれば……国なんて税で成り立つてるんだよな。平民が反乱を起こせばここまでひどいことにはならなかったはずだが……」

コンコンと扉をたたく音がした。

カリアが扉を開けるとそこにはブアレッチア王子がいた。

「これはこれは王子、こんな時間にどんなご用でこちらへ？」

「口の聞き方には気をつけると僕の父に言われませんでしたか？」

「言われましたよ。ですが変えるつもりはありません。私は国を捨ててはいませんしね。それに話し方が変わったようですね。王子。」

「あなたに話があつてきたのですよ。二人を別の部屋にはけてもらえませんかね。」

「……二人がいてはいけないような話をするのですか？」

「これは王族の話ですからね。あの二人には関係ありません。」

「かまいませんよ……すぐ部屋から出ていってけると約束していただけるのならば。」

「ハハハッ、お優しい。」

ファアラが二人に合図をすると二人ははげ、部屋にはファアラとブアレッチアの二人になった。

「で、お話とは？」

するとブアレッチアは目にも止まらぬ早さで電気を消し、ファアラを押し倒した。

「やめろ！何をする！」

驚きのあまり声が裏返った。

「夜、部屋に王が来て娘が王を部屋に入れたとき、それは肉体関係を許したことになる。」

ギユツと片手でファアラの両腕を頭の上で押さえ付けた。

「やめる！私は許してなどいない！」

「ならなぜ下着姿でいる！望んでいたのだろう！」

「そんなわけないだろう！動きにくかったから脱いだだけだ！」

「ユリアから望んで来たんだろう！？俺の妻となるために！」

ファースラの首元にブアレツチアの顔が埋まり、思わずファースラは身震いした。

「ふ、ざけるな………！」

足がブアレツチアの心臓より少し下、お腹の辺りにあたった。

いや、正式には蹴ったのだ。

「グッ！」

ブアレツチアがひるんだのと同時にファースラは逃げ、脱がされかけた肩を押さえながら部屋の電気を付けた。

この時、ファースラは初めて自分がブーツをはいていてよかったと思つた。

かたい分だけ威力が強く、皮膚じゃないぶんだけ、滑りやすく押さえ付けられても抜けやすかったからだ。

「何故だ………」

二人は息切れをしていた。

「今すぐお帰りください王子。私はあなたの多妻趣味の中の一人になる気はありません。そんなに女子おなこが抱きたいのなら、あなたを自ら進んで求めてきている昼間のような女子達をおだきになりなさい！私はあなたの子を産む気も、あなたの多妻になり、言いなりになるつもりも自我を殺す気も、一切ありません！そんな私の態度が気に入らないと申すなら最初から申し上げました！私からこの家なり城なり奪えばいい！力が全てではないことを証明してみせます！」

「本当に………屋根がなくてもかまわないと？」

「ええ！」

「クッククク。ここは力がものを言う地です。今後が楽しみですよ………ファースラ姫。」

そういつてブアレツチア王子はファースラの部屋を後にした。

喧嘩

そのすぐ入れ違いでカリアとナハスがファアーラの部屋を訪れた。

ファアーラは思わずナハスに抱きついた。

「ファアーラ!？」

ファアーラは震えていた。

「こわ……. かった。私は間違ったことは言わなかったよな？言わなかった……. そういつてくれ。誰でもいいから…….」

カリアはファアーラを見て目を見開いた。

「姫様、その洋服は!？それに、首にあるそのあざは何です!？」

カタカタと震えながらファアーラは頭を横に振った。

「まさか……. あのやる…….!」

動き出したナハスをファアーラは押さえ付けた。

「いいんだ……. いいんだ!」

「何がいいんだよ!お前がこんななつて何が!」

ファアーラは震えてはいながらもナハスを睨み付けた。

「私を誰だと思っている!私はユリアの王族の血を引く姫であるぞ!」

「何が……. 姫だよ。そんな……. 前から知ってるよ。お前が……. お前が姫扱いするなつて言っただろ!」

ファアーラはナハスの胸に顔を埋めた。

「……. お願いだ……. 今は……. 動かないでくれ……. 私に考えがあるんだ……. でも……. もうしばらく……. このままで……. いさせてくれ。」
カリアがナハスの肩に手を乗せて少し微笑んでから部屋をあとにした。

「……. やめてくれよ……. もう。勘違いするようないことはやめてくれ!」

ファアラがえ？といった顔でナハスを見上げた。

その首筋に少し赤っぽく残るキスマーク。

「もう辛いんだ……お前の……親友で居続けること……」

そういつてナハスはファアラの肩に頭を落とした。

ナハスからファアラの手が離れる。

「それは……絶交する……と……い……う……とか？」

「このままでいけばな。」

「わ……かつた。もう、いい。おまえの好きにすればいい。おまえの人生だ……く、国に帰ってもいいのだぞ。」

その目に涙をためて、泣かぬように必死に眉をしかめるファアラ。

「ファアラ……俺ってその程度の存在か？」

ナハスは手を伸ばす。

が、ファアラは身を後ろへ引いた。

「く、くるな！私に……触るな！」

そういつて別の部屋に閉じこもったファアラ。

「あ、おい！」

「もう……ナハスなんか嫌いだ！嫌いだからどこへでも行けばいい！ブアレッチア王子みたいに手あり次第女でも探す旅なりなんなり好きにすればいい！」

扉ごしの会話。

「ああ、そうかよ。よくわかったよ！」

言っていることは対立していても二人が心で思うことは一緒だった。

“嘘だ……こいつ（あいつ）に嫌われたら俺（私）はこれからどうやって過ごしていけばわからない。”

“どうして身分なんかあるんだろ……”

狙われし姫君

翌朝、ファアラは元気がない顔で着替えをすませると朝食を取り、ブアレツチア王子に呼ばれ、王たちの元へ向った。

「失礼いたします。お呼びにあずかりました、ファアラですが・・・
・・・何事にございますか？」

王はこほんとか咳払いをしてファアラを少し睨み付けた。

「我が王子が、そなたを正妻にしたいと申した。」

「そうですね・・・ですが王様、私はブアレツチア王子の妃になる気はありません。」

「何を言うか！そなたに拒否権はないわ！どうやって王子に取り入った！」

ガツと肩を捕まれ、激しく揺すぶられたファアラは抵抗する気力さえ失い、だらしなほど頭が揺れた。

そして王はファアラの首筋にあるものを見つけると王はニヤリと笑った。

「ほう・・・これは・・・ブアレツチアのお墨付きであつたか。そんなにじゃじゃ馬姫がよいとは・・・。」

ファアラは思わず顔をしかめ、首筋を片手で隠し、片手で王を突き飛ばした。

「やめる！！触るな！」

息を荒々しく吐き出し、ファアラは昨日起こった全ての嫌なことを封じ込めようと戦っていた。

「フンツ、まあいい。もういけ！」

ファアラはその場を走り去った。

ファアラの頭の中には“最低だ・・・やつら・・・みんな最低だ！”と、そればかり繰り返し返され、前を見ていなかったせいか、人にぶつかった。

「す、すまない。」

フアーラが浮かぬ顔で相手を見ると相手はかなり驚いた顔をしているナハスだった。

フアーラはナハスに抱きつきたかったがぐつところらえた。

全て吐き出したかった。

不満をぶつけたかった。

でも、ダメだ。

「すまなかった。怪我はないな。では私は部屋に戻る。おまえも国に帰るがよい。」

わざと突き放し、ナハスの顔を見ずにすべて言い切った。

ナハスは力チンときてフアーラの腕をつかみ、自分の方向へ向かせた。

「フアーラ……！」

フアーラの顔は歪んでいた。

「呼ぶな。私をフアーラと呼ぶな！やめろ！もうやめてくれ！私はおまえといた時間をなかったことにはできない！私が嫌いだということならいつそのこと私を殺してくれ！」

ナハスは思わずフアーラを抱き締めていた。

「嫌いじゃねえよ……嫌いじゃねえよ！」

「やめろ！放せ！離せええ！」

フアーラは暴れたが、ナハスはびくともしなかった。

「……何故私は私が好いた異性に嫌われやすいのだろうか……セタルだつて……初めて赤ん坊として見たときは確かに可愛いと思ったのだ。なのに……いつの間にか親も私を突き放し、セタルを溺愛して、セタルは……セタルは私が憎いと言った！私は他国ではじゃじゃ馬姫と名を馳せるようになり、今度はナハスさえ……！そこまで私は出来損ないか！？そんなに人目に触れることさえみつともないか！？ならなぜ生まれた！どうしてこの世に存在するんだ！」

「フアーラ……違う。お前は出来損ないなんかじゃねえよ。」

俺は……お前が好きなんだ。」

「は……ナ……ハス……？」

「だからごめん。友達なんかじゃいられねえんだ。」

「ま、まで……待つてくれ！そ、それではまるでお前が私に恋愛感情を抱いていたいるようにしか……。」

「抱いてるんだよ。」

ナハスはファアラから離れ、ファアラに背を向けた。

「だからおまえの護兵を任されたんだ。お前が嫁いで自分の無力さを痛感させるために。親父が俺をファアラにあわせたくなかったのもそのせいだ。けどもう俺、痛い程痛感してるんだ。お前は国王にも手が届く存在で……俺はただの平民ってこと。だから今のはなかったことにしてくれてかまわない。俺がおまえにしてやれることは何一つねえんだ。」

「ナハス……やめてくれ……私を突き放さないでくれ！私はもう姫なんかじゃないんだ。ただの親の手ゴマで、お前と立場は同じなんだ。私もお前が好きだよ。私を単体として見てくれて、平民とか王族とか差別しないで扱ってくれるお前が好きだった。なのに……お前は私を突き放すのか！？」

「じゃあどうしろって言うんだよ！俺はもう無理なんだ。これ以上ただの友達でなんていられない！いっそのことお前が俺を嫌えよ。」

「ば！バカじゃないのか！？私がお前を嫌えるわけがないだろ！」

ファアラが強く否定した瞬間ナハスはファアラを壁に押しつけ、服を無理やり脱がせた。

「な！何するんだ！」

ファアラの手を押さえ付け、ファアラはしばらくじたばたもがいていたがすぐに静かになり、ほとんどナハスにされるがままだった。肩まで服が脱げるとナハスは首筋に顔を埋めた。

ブレッチア王子とは反対方向にまたキスマークがつく。

ファアラはビクリと体を強ばらせるが、ナハスの顔がファアラに近づくと恐怖など消し飛んだ。

ナハスはファアラにキスをした。
跳ねとばされてそのまま嫌われると思っていた。
が、突き飛ばされない。

今か今かと顔を離し、目を開くとファアラもゆっくりと目を開いて
いた。

その顔に恐怖はなかった。

むしろ、何か遣り遂げたかのようにキリツとした顔つきをしていた。
「……………何で抵抗しないんだよ。このままだと本当に襲うぞ
？」

脅しをかけるようにファアラを掴んでいる手の力を強める。

少しファアラの顔が痛そうに歪んだが、すぐに口を開いた。

「おまえがしたいようにすればいい。私は私でお前を失いたくない
のだから体くらいお前にくれてやる。ただ……………そばにいて
くれるな？」

「なに……………言っただよ！」

「言っただろう！私はお前が好きだし必要だ！お前が何をしようと
私にとってはお前はお前なんだ！代わりなんかいない！今何をした
からといって過去すべてを消し去ることも、過去は過去だと割り切
ることも私にはできない！」

「……………やっぱりかなわねえよ。ファアラ……………俺と
お前の好きは違う。」

ナハスの手が離れ、ナハスはしゃがみこむと前髪をくしゃりとつか
んだ。

ファアラも力が抜けたのかストーンと座り込み、ナハスに触れた。

「私には……………恋愛ってよくわからないよ。だから……………
・もう少し時間をくれないか？理解してみるよ。急ぐ必要はないだ
ろ？」

「……………そうだな。」

ナハスは苦笑した。

ファアラはニヤツと笑ってみせた。

「それでな？ナハス、悪いんだけどたつた今腰が抜けて壁に寄り掛かったまま歩けないんだ。肩をかしてくれないか？」

ナハスは目を丸くしてからお腹を抱えて笑った。

「やっぱお前にはかなわねえよ！」

「いいから早く！」

手を伸ばしたファアラの首筋について目が行く。

赤い印が刻まれている。

それに手にも微妙に赤くなって跡がついている。

それだけのことをしたんだと思うと罪悪感に苛まれた。

ナハスはファアラの手を取り、かついだ。

「ちょ！私は肩を貸せとは言ったがかつげとは言っていないぞ！」

「うるせえ腰抜け！そんなんじゃ歩けねえだろ！」

「な！誰がこうした！」

「いいから黙ってるって！ほら！部屋だぞ！」

「お！早いな！」

部屋に戻り、ファアラをベッドの上に寝かせる。

ナハスは一息ついて上着を脱いだ。

そんなナハスをファアラはポカンと見つめていた。

「なんだよ？」

「なんだ……その筋肉は……」

首元や背中、二の腕など、あきらかにファアラとは違った体付きをしている。

「あ？別にこれくらい普通だろ。」

「し、しかし！セタルはそんな筋肉はなかった……はすだ。」

「王族はそうだろうな。部屋にこもりっぱなしじゃ細くなるってもんじゃねえの？」

「だが……シャツごしにもこんなにも男女で体付きが変わってきてしまうものなのか！？」

「そうなんじゃねえの？俺に聞くなよ。」

「だってあまりにも違うから……」

「違うから気になるんじゃないの？余計に……さ。」

ファースは目を丸くした。

「そういうものなのか！」

そこへカリアが入ってきて二人の顔を交互に見合わせてクスリと笑った。

風呂場騒動

「本当にお二人は仲がよろしいですね。」

「カリア！そう言えばな！私、初めて知ったんだけど、人の唇って柔らかいんだな！」

ナハスとカリアが二人して吹き出した。

「な、何を姫様……！」

カリアは言葉をつ返させ、ナハスは顔を真っ赤にしながら苦しそうに咳き込んでいた。

「いやな、よくわからないじゃないか。口とか皮膚とか。いやあ、知らないことはまだ多いな！」

目を輝かせながら片手に拳を握り、うんうんとうなずくファーラ。

「ひ、姫様？そのお首は……！」

「あ……？」

バツと目にも止まらぬ早さでファーラは首元を隠した。

「悪い。前からあったんだからちゃんと最初から隠しておくべきだったよな！」

「え……前から……？そつちでしたっけ？」

「何か勘違いしてるんじゃないか？カリア、しっかりしてくれよ？」
ファーラは必死にごまかしていた。

「カリア、風呂へ行くから用意してくれないか？」

「……あ、はい。」

その間、ナハスはずっとハラハラしていた。

「姫様、用意ができました。」

「ありがとう。じゃ。」

ファーラが風呂場へ向かってから数時間たち、出ようとした時、王が風呂場に入ってきた。

「じゃじゃ馬姫、こんばんわ。」

バスタオルを前にして手でおさえつけ、王を睨んだ。

「こんばんわ。王様。あなたの風呂場はここではないはずですよ。このような場所ではなく……。屋上の特大の場所でしょうか？」

「そなたに拒否権はないよ。」

「ファアラは二、三歩さがり、おけをつかむと勢い良く王を叩いた。

「出ていけこのド変態王！カリア！ナハス！」

すぐにカリアとナハスが駆け付けたが、王はすっかり地面にのびていた。

「ファアラ！おまえ……。どんな格好で俺を呼んでっ！」

「ファアラはバスタオル一枚というかなりきわどい格好をしていた。

首元は幸い髪の毛で隠されていた。

「いいからこの王を外へ運びだしてくれ！」

「ナハスは王を運び出し、廊下にねかせた。

「悪かったな。いきなり呼び出して。」

服を着て、濡れた髪の毛を束ね、片足しかはいていないブーツをはきながらファアラはナハスの元へ行った。

「なんだ？その格好。ずいぶん露出が多い気が……。」

「ああ、色やデザインは少しばかり派手だが動きやすいんだ。踊り

子の服だつてさ。しかもズボンのな！」

「ナハスの前でもう片足のブーツをはく。

「いつからお前は踊り子になったんだ。」

「そういつつ、普段見ることはないファアラの姿にチラチラ視線を送るナハス。」

「やっぱり変か？」

「ブーツをはき終えたファアラがナハスの顔をのぞく。

「あ？まあ、そのブーツはないだろうな。」

「それならば……。サンダルという手がありますよファアラ姫。」

「ブアレッチア王子！」

いきなりあらわれた王子に皆驚くばかり。

「どうしてこちらへ！」

ファアラは少し強い口調で刺々しく言った。

「あなたにあいにきました。僕の正妻候補者ですからね。あいにきて当然でしょう?」

「ですから、何度も申し上げたでしょう!私にはあなたの妻になる気はありません!その前に!あなたの子を産む気もありません!女子が抱きたいのなら私でなくてもかまわないでしょう!だいたいどういう風の吹き回しです!?私が正妻候補者など!」

「あなただからですよファアラ姫。僕は今まで何でも手に入れてきました。そう、何でも。だから手に入らないものが珍しいのです。

僕は刺激がほしい。なんと少しでもあなたを正妻にむかいいれ、僕に絶対服従していただきます。」

「あら、それは“絶対”嫌ですわ。手に入らぬものを望んでいたらきりがありませんよ。私はあなたに服従するのも、あなたの暇潰しになるのも、あなたの正妻なるのもお断わりいたします!私がほしい値は傍観者ですから。壁の花と私を交換なさったら?壁の花はきつと喜ぶわ。」

「どちらにしろあなたに権力はないのですよ。あがくだけ無駄です。早く僕の者におなりなさい。」

「お断わりいたします!それに今晚風呂場にて王が裸の私の元を訪れましたけど・・・これはどういふことかしら!??」

ファアラは床でのびている王を指差した。

「父上!!また私のものを横取りしてきたのですね!まったくどうしようもない方だ!上等な女や酒と聞くと誰のものでもかまわず手を付けようとなさる!まあいいでしょう。後でメイドにあなたの部屋にサンダルを届けさせますよ。」

そういつて王をメイドたちに運ばせるとファアラの前できびすを返していった。

「なんだったんだ・・・今のは?」

ポカンとファアラがつぶやく。

「嵐が去っていったな。それよりお前、王のびてたけど何したんだ？」

「ああ、タオル一枚だったからな。桶おけでぶんなくっておいた。」

「はあ！なんだそりゃ！お前、明日大丈夫か！？」

「まあ、私は一応王子の所有物ものとなつていているらしいからな。王子の物に手を付けようとした王が悪いってことですまされるんじゃないか？」

「はあ！？」

「まあなんとかなるだろ。城内を一緒に歩かないか？」

「別にいいが。」

「何をつつたつている。カリア、おまえもだぞ！」

「え！は、私もですか？」

いきなり呼ばれたカリアは一瞬戸惑った。

「行くぞ。この城は一人だと何が起こるかわからなくていけない。」

フウつとファアラは息をはきだした。

「それは禁句だろ……………」

ナハスがつぶやく。

「ああ、そうだな。これからは気を付けよう。」

ファアラは首元のスカーフを巻き直し、歩きだした。

「じ、地獄耳！」

ナハスが驚くとファアラは振り返りもせずに答えた。

「あのなあ、隣にいれば大抵のことは聞き取れるぞ。」

そしてしばらく城内を歩き回ると中央部に位置する大きな中庭へ出た。

「まるで森のようだな。」

ファアラがガラス越しにつぶやく。

「そこは畑ですが、何かご用ですか？」

謎の空間

驚いて三人が後ろを向くと、メイドが一人立っていた。

「聞きたいことがあるのです。ここへくる途中貧困に喘ぐ国民たちを見ました。民達はこんなになつたのもすべて王が税にさらなる厚税をひくからだと言いました。ですが、あのような状態ではとれる税も取れないでしょう？おまけに他国を近付けないときている。この国は一体どのようなにして成り立っているのですか？」

「フアーラはとたんに口調をかえた。

「この国は……城内が一つの国なのです。城外はもはや荒地、王は税を必要とはしておりません。少し前まではとてもよい王様でした。ですが、何かしらで圧倒的権力を握った王はいま遊び惚けていらつしやるのです。」

「そうですねか……城内を少し、案内していただけますか？」

「わかりました。」

四人で歩きだした。

「こちらは男性用のお風呂です。この城に男性は数少ないのでかなり小さめに作つてあるようですが。」

しばらく廊下をあるき、壁に突き当たると台所があつた。

「ここは料理部屋です。」

すると少しもどつて階段を上る。

「2階です。2階は王子のお気に入り女性達のお部屋となっております。」

「え！ここすべて、か？」

ナハスが驚きの声をあげる。

「はい。」

そして再び階段を上る。

「3階です。3階は王さまのお気に入り女性達のお部屋となっております。」

「ここもかよ．．．．．」

ナハスは半ば呆れていた。

「はい。」

そしてまた階段を上る。

「ここからはほとんど一つの町です。右側奥から説明しますと、洋服仕立て、電気製品、水道管理、そしてもう一つ洋服仕立て、そして屋上へと続く通路、さらに向こうの塔が王族のすみかとなっておりますが、王達は基本、あちらの塔でお休みになられることはありません。」

「ハーレムだもんなあ。」

ファアラが腕組をしてうなずいてからメイドに向き直り、言葉を発す。

「で．．．．．平民がいらないのはなぜですか？」

「王はいつのまにか強大な権力の持ち主となりました。ですが、それでも足りないものがあつた。それは．．．．．食べ物です。だから平民達から税に税を重ね、食べ物を平民から奪っていきましても．．．．．いつの間にか全てが揃うようになったんです。植物は異様な程急成長をとげ、野菜や果実はたわわに実り、動物たちでさえもあそこにつつといると急成長をとげていくんです。それが、あの中庭の畑です．．．．．あそこは怖くて近づくものがいません。短時間なら問題ないのですが．．．．．長時間いますと．．．．．体が作りかわるように急速に老化していくのです．．．．．」

小さくメイドは震えた。

「誰か．．．．．そのような目にあわれたのですか？」

「私です．．．．．その他にも数名。」

「え．．．．．?でも．．．．．」

どう見てもまだ若く、二十代くらいだった。

「私は本来の歳でまだ15なのです．．．．．ですが体はすでに二十代後半．．．．．私よりいくらか年上のかたたちはたくさん

いましたが、私の叔母が……叔母が急激な老化により死んでしまったんです！あの畑ができたのは最近でしたから……みな、よくわからなかったのです、それで……。」

「それは……嫌なことをお聞きしましたね。辛くなるようなことを教えてくれて……ありがとう。」

まだ15だという少女は顔を上げて微かに微笑んだ。

「……あなたみたいな方は初めてです……みなメイドというだけで邪険に扱われるのに……。」

「私は嫌いなもの以外邪険に扱うつもりはありません。」

「この方達がみな……権力をふるう人達ではなく、あなたのような方ならよかった……1つ付け足しますと……あの畑の横の部屋は牢獄になっています。入れられたら最後、二度と今と同じ姿で戻ってはこれません。運がよければ私のように……運が悪ければ叔母のようになります。好奇心で足を踏み入れないように気を付けてください！」

「ええ、気を付けましょう。注意、ありがとう。」

ファーストは軽くきびすを返していった。

贈り物

部屋に着くと一人のメイドがファアラの部屋の前に立っていた。

「……………どうかなさいましたか？」

「ファアラ様、ブアレツチア王子様からのお届け物です。」

「ああ、そういえばそんなことを言っていましたね。すみません、そのプレゼントをブアレツチア王子に返していただけますか？その時にこう伝えてください。“私の身の上の安心が確保できないかぎりあなたに近づく気はありません”と。」

「え！か、返されてしまうのですか？王子が娘に物を送るときはそれだけの価値があるとみなされた時で、正妻候補者の中でも一番気に入られ、正妻に近いものの証なのですよ？」

「ええ、ですが私はまだ誰の妻にもなりたくはありませんからね。」

「そうですか……………失礼いたしました。」

そういつてメイドは引き下がった。

「よかったのか？この城を追い出されるぞ？」

「かまわぬ。それよりあれを受け取って体を許したと判断されたらたまったもんじゃない。」

「姫さま、何かお分りになったことはありませんか？」

「ああ、異常な権力と異常な畑を調べなければならぬ。まあ、なんかしらで邪魔されるだろうが、それでも調べてみせるさ。」

「お前らしいな。」

「カリア、後で話がある。ベランダへ来てくれるか。」

「はい。」

ファアラは一足先に自分の部屋へ戻り、ベランダの風をその肌を受けていた。

「姫さま、お呼びですか？」

「カリアか……………お前は人を……………愛したことがあるか？」

「どうしたのですか？姫さま。」

「私はない。だからわからないんだ……どうナハスに接しているのか。どうしたらナハスは喜んでくれるのだろうか。一思いにしたいことをさせてやればいいのかと考えたが……逆効果だったみたいなんだ。」

男のように背中を手摺りに寄り掛かせ、手を広げる。

顔は外の闇を見つめていた。

「つまり……姫さまはナハスさんが大事なのですね？」

「ああ、お前とナハスと同じくらい大事で大切だ。」

「誰かと同等では……ダメなのかもしれません。」

「何故だ？」

「自分はその人だけを見ているのにその人は自分を特別だとは思ってくれない。」

「ああ……キャリア……確かお前は一度……ナハスが好きだった時があったな。」

「ずいぶん昔の話をなされる。」

キャリアがクスクス笑った。

「本当か？」

「え？」

「本当に昔の話か？聞けばその感情は忘れようにも忘れられないらしい。」

「昔の話ですよ姫さま。昔でなければ何があると？」

キャリアはニコリとほえんだ。

「気付いてるか？キャリアは嘘を吐くとき笑う。おそらく自制し、私をへたに心配させないために。」

「そんな。私だって笑いますよ。」

「それだけじゃない。自分の手を見てみる。」

キャリアは自分の手に視線を下ろすとその手にはしっかりと自分の服が握られていた。

「強がっている証拠だ。いやなことがあっても笑ってごまかすおま

「何用でしょうか？私は身の上の安全を確保できないかぎりあなたには近づきたくありませんと言いました。今日はもう遅い。今すぐお引き取り願いたいのですが。」

「そういわないで。僕のプレゼントを受け取ってはくれなかったようだけど？」

「ええ、妻になる気はありませんから。」

「ですがあなたは僕の婚約者候補としてタイターナへきたのでしよう？？」

「ええ、あなたにも目が止められぬような壁の花が望ましいですね。」

「フアーラ姫。」

ぐいっと腕を捕まれ、外えだされると、扉を閉められた。

「何をする！」

「君と二人で話しかつたんだ。わかった。無理には手を出さない。約束しよう。だから俺をそんなに毛嫌いしないでくれ。」

「本当に二人になると話し方がかわりますね。」

「君はあの二人といると変わるよね。俺にも心を許してほしいな。」

俺ばかり君に心を許すなんてあまりにもじゃないか？

「あなたは女子の前だと皆心を許していらつしやるんでしょうね！」

「まさか。俺の考えを知り、俺の本当の姿を知っているのは君だけだよ。何故だろうね。君は安らげるんだ。近くにいるだけでいいと思っただのは今回が初めてだよ……父様にも本気で腹を立てたしね。」

「では私の安全は確保済と言うことで……？」

「いいよ。だけど父様からは守れないよ。」

「わかりました。あなたに対するあからさまな態度を少しばかり改めましょう。」

「それと、これ。」

その手にはメイドが持っていた物と同じ物が乗っていた。

「ですから……」

「わかってるよ。ただ、その靴じゃはきづらいだろ？だからはいてほしい。気持ちとか無視していいから。」

「……そうですか、では……ありがとうございます。」

「ファーストは靴を受け取ると、はきかえた。」

「ずいぶん楽な靴ですね。」

その様子を見てブアレッチアはホッとしたりするように笑った。
「君に似合うと思ってね。でもま、身の上の安全は確保できて君は必ず俺のものにするつもりだけだ。」

「その根拠のない自信はどこからくるんだか。」

「全ては君が俺に振り向くまで。」

「振り向いたらポインなら……いいでしょう振り向いてあげますよ？」

「そういうのじゃなくてね……。」

クスリとファーストは笑うとブアレッチアは黙った。

「何か？」

「今日は笑顔が見れたからよしとするよ。」

そういつてブアレッチアはきびすを返していった。

王子の背中を見送りなら、ファーストはブーツと考え事をしていた。
やっぱり私には一人だけを見続けるその気持ちかわからないよ。

ナハスやカリアが経験している痛みを……私は知らない。
まだ、しらなくてもいいんじゃないかと思うんだ。

それじゃ、ダメなのか？

好きの意味

部屋にため息をつきながら戻るとナハスが駆け付けた。

「キャリアさんから聞いた！平気だったか！？」

「おう！問題ないどころか身の上の安全を確認することに成功したぞ！」

「そうか……。」

ナハスがホッとした表情を見せたが直ぐにそれも硬直した。

「おまえ、それ……プレゼントじゃ……。」

「あ？うん。機能性をとったほうがいいだろうって。正妻候補からは抜け出せなかったが、プレゼントには特に意味はないと王子本人がそういつていたしな。なあ、ナハス……人を好きになるってどういうことなんだろうな？」

「なんで俺にそんなこと聞くんだよ。」

「キャリアにも聞いた。でもよくわからない。誰かが特別で誰かと同等ではいけないとキャリアに教わった。でも、私はよくわからない。

その人ばかり見てその人ばかり追い掛けてしまうということ……」

「……それはお前が俺を意識することは皆無だと言いたいのか？」

「違う……ただ、純粹に知りたいんだ。キャリアやナハスも経験している痛みを私は知らない。知らないからこそわからなくてわからないからこそ知りたいと思うし、理解したいとも思うんだ。」

「ふーん？じゃあ今俺が誰かを好きだって言ったら？」

驚いたと同時にファアラの心臓が少し跳ねた。

私を好きといったのは嘘ってことか？……と。

「お前のしたいようにすればいい。」

ナハスはため息をついた。

「まだまだだな。いいよ。無理する必要はねえんだ。少しずつお前

の決めた誰かと恋でも何でもすりゃいいだろ。」

「……………その言い方じゃまるで私とお前は対象外みたいだな。」

「実際そうだろ。」

「なんでだ？一人の人間だろ？そこには身分差などない。それとも……………お前は私を身分差なしで見たことはない……………と？」

「当たり前だろ！身分差があるんだよ！だから俺はここにいるんだ！」

「やっぱりお前も身分なのか！近づいたのが私が王位継承者だったからではなかったとしても、私を単体で考えたことがなかったという事か！」

「違うだろ！……………あるんだよ……………いろいろ問題が……………お前という単体の中に……………姫さまっていう身分が……………」

あわててファアラはナハスの口を両手で押さえた。

「ムッ!？」

ファアラの方を見ると、ファアラの視線の先にはこちらを向いたカリアがいた。

ファアラはあわててナハスから手を離れた。

「カ、カリア。もう寝る支度をしなければならぬな！」

「姫さま、いいんです。いいんです……………どんなことを話し合っていたかぐらいわかっていますから。そんなにあからさまな反応をしないでください。」

カリアは“ニコリ”と笑い、上布団をもつてくるとベッドの上に広げた。

「カリア……………」

「なんだ？カリアさんがどうかしたのかよ。」

「……………おまえがたいして鋭い奴じゃなくて助かってるよ。」
また……………カリアに無理をさせてしまった。

また……私のせいで……。

「お前のせいじゃねえよ。」

びっくりして顔を上げる。横にナハスがいて、声はナハスのものだった。

「え……？」

「何考えてんのか知らねえけど、お前のせいじゃねえよ。」

「な、何言ってるんだよ。」

そうだ……。ナハスは昔から私が考え事をしてしていると私の感情を読み取ったかのように私がほしい言葉をくれる……。もしかししたらそんなやさしさに私は何度も甘えたのかもしれない。

欲しい欲しいばかりで望んでいた私に与えてくれた言葉の数々……
……気付かなかった。

なんでだろう。

これが当たり前だと感じていたから……か？

「知ってるか？お前は自分のせいだって気負ってるとき、下唇を噛み締めるんだ。」

「え……。知らなかった……。」

フアーラは思わず自分の唇に触れた。

「やっぱりか。」

ハツと息が吐き出され、ナハスは笑った。

「おまえ、そんなふうに笑えたんだな。」

「は？」

「最近お前は笑わなかった。ここ数年会ってなかったからだけかと思っただが、違う。笑ってもいつも寂しそうに笑った。心のどこかで本気で笑ってなんかなかった。でも……。やっと心から笑えるようになったんだな。」

フアーラはナハスの顔に触れた。

「そうか？」

ナハスはパツと顔を剃らした。

フアーラはナハスに一度期待させるなと怒られたことを思い出した。

「あ……す、すまない。」

「いや、別に。なあ、本当にこのままあの王子の妻になっちまうのか？」

「ならない。できれば……なりたくない。」

「何で？」

「わからない。でもなりたくないんだ。あの王子のことも、そこま
で嫌いなわけじゃないんだが……でも、なんだろう。嫌な
んだ。結婚するくらいなら好きな人も愛する人もできなくていい。
私は……うまく言えないけど……まだお前たちと
いたいんだ。」

うまく言い表わせない。

王子のことも嫌いなわけじゃない。

でも妻にはなりたくない。

まだ知らないことや知りたいことがたくさんある。

それに、嫌なんだ。ナハスに私の花嫁姿を見られるのが……

「フアアラ。」

「何だ？」

「気持ちが悪惑なら悪惑といえ。諦めるから。はぐらかされ続ける
のは正直、辛いんだ。」

「迷惑なんかじゃない！ た、ただびっくりしただけだ。私もナハス
が好きだけど……私とナハスの好きは……違うん
だろ？」

「違うね。」

「もう寝よう。いくら考えたって今すぐにはわからないよ。また明
日な？ ナハス。」

「おう。」

ベッド前までいくとカリアが一人で座っていた。

ちんちくりん

「キャリア……」

「あ、お帰りなさい。」

「キャリアは辛いのか？好いている相手が別の相手を好いていて、しかもその相手がおまえの近くににいるものだとしたら。」

「つらいです。でも、だからといってどうこうなる問題じゃありません。私は彼が好きで、彼は姫さまが好きです。姫さまは……・どなたがお好きなのか存じ上げませんが。」

「私か？私はキャリアやナハス……基本的にはみんなだ。好きなものは好きだし、その思いは偽りが無い。だけど同時に嫌いなものは嫌いなんだ。縛り付けられることに私は慣れてないからな。」

「本当に……姫さまにはかなわないなあ。私も姫さまの側にいて楽しいのです。つらいことも、苦しいこともあるけどそれ以上に楽しいのですよ。だから今までそばに居続けることができました。姫さまだったからです。ですから変に気をつかわないでください。」

「こっちまでおかしくなっちゃいますから。」

「ああ、そうだな。」

私も本当は早く知りたいんだ。

つらいことも、苦しいこともすべてが宝となる気持ち……そんなマニアルみたいなことは全て絵本から小さい頃に学んだものに過ぎないから、未知なる物に好奇心と不安が少しずつあるけど。ナハスは……私が王子と会っているときは、辛いのかな。キャリアはつらいと言っていたけれど……恋……かあ。

ブアレッチア王子もしてるんだらうか？いや……まさかな。いいや、今日はこのまま寝るとしよう。

朝、ファールは起きると踊り子の服を探した。ズボンのものが見当たらない。後は下着のような物やスカートわけのわからないぼろぼ

るな服など動きにくそうな物だったり、露出が激しすぎたりする。ファアラはため息を吐いてスカートと下着がセットになっているような踊り子の服を着、その上から上着を羽織った。

だが、上着はボタンの数が少なく、胸元が開いていて胸をあまり隠せてはいなかった。

「まあ、しかたないな。ユリアの武装服を着るわけにはいかないだろう。」

ファアラはそうつぶやいてカリアの元へ向かった。

「カリアー？カリア、いるかあ？」

そこへナハスが現れてファアラの姿を見るなり驚き、しばらくファアラを見つめてから眉をしかめた。

「お前、その服、なんだよ？」

「なかつたんだ。ましな服が。変か？」

「変っていうか。この辺りが厳しい。」

とナハスは言いながら自分の胸を指差した。

ファアラは自分の胸元を見てからこの服が胸を強調させる服だと気づき、手や腕で胸元を隠した。

「おまえ、見てたんだな！？私の胸を！」

「な！ば、バカ！そりゃ俺じゃなくなつて見るだろ！」

「何だよ！変体！」

「俺は注意しただけだろ！」

「姫さま、ナハスさん、人の部屋の前で何事でしょう？」

カリアがジーツとファアラを見ていた。

「カ、カリア！あんな！ナハスが変体なんだ！」

「変体じゃない！」

「どちらでもいいです。今日はまた……ずいぶんとセクシ
ーな格好ですね姫さま。」

まだ眠そうに欠伸を噛み殺しながらカリアはファアラの服装を見た。
「やっぱり変か？踊り子の服以外着るものがだんだん減ってきてな
かわりにぼろぼろな露出が高すぎる服やすつけすでの来てるのに体

がすけるような服しかなかったんだ。あの部屋を掃除しているメイドが置いていくんだろうな。」

「そうですか、私の部屋はほとんど女中っぽい服が増えていきます。女中でよければお貸ししますよ?」

「そういつて持ってきた服はだいぶ薄汚れて汚かった。」

「ひどい服をキャリアに回すものだな。」

「ふーん。そんなことがあるのか。俺の部屋は特に変わったことはねえなあ。」

「よし、キャリアおまえの部屋の服を借りていいか?」

「ええ、こんなのでよければ。これが一番ましな服です。」

「そういつて今持っている服を微かに揺らした。」

「それが一番とは……まあい、なら一番ぼろいのをくれ。引き裂いてもいいようなやつだ。」

「え……あ、はい。」

持ってきたのはデザインこそいいもののボロボロのドレスのようなものだった。

「質素だな。多妻達を目立たせるため……か。」

「すぐさまファーストは部屋にもどると早速服を切り裂き、ウエストが緩くなっているのを引き裂いた布で縛った。」

「スカート部分をなんとかしてズボンにしたかったが出来ずに袖は短くタンクトップのようになった。」

「サンダルをはき、フーッと息を吐き出した。」

「これで少しは動きやすくなったかな。」

「それはまるで質素よりもちんちくりんな格好だった。」

「おう!二人とも!」

「部屋を出てすぐに二人を発見し、声をかけると二人は目を見開いた。」

「姫さま……それは……一体……。」

「動きやすくなったよ。ありがとな。」

「いや、動きやすいとかの問題か?それじゃあさっきのほうがよくぼどまじだぞ?」

「いいんだよ！とにかく私は王の急激な権力について探るから！」
そう、この城はおかしい。

反乱軍が出れば攻め込めないような城でもない。
兵の数は少なく、私の護兵ということまでついてきたナハスのような
人たちでさえいなくて、この宮殿では珍しい。

滅ぼそうとすれば滅ぶはずの城。
ましてや他国さえ近付けずにそれでも戦争にならない理由がわから
ない。

戦争にはなりかけたのかもしれない。でも戦わずにどうやって現状
維持を………？

それにこの城の中心部分辺りだけ時間の流れが速いというのも気に
なる。

なぜ同じ時間、同じ空間にいてそのようなことが起こるのか……

権力、畑。

怪しいものが多すぎる。

お誘い

「フアーラ姫？」

びつくりして振り向くとそこにはブアレッチア王子がいた。

「これはこれ……王子。」

「……その格好は？」

「動きやすいものでついつい。」

「まあ、いいでしょう。今日はあなたの元をおとづれるつもりでした。」

「このような朝早くからですか？」

「ええ、一緒に朝ご飯でもいかがですか？」

「身の上の安全は？」

「父様も母様もいませんからね。確保いたしましたでしょう。それでも信じられないというなら兵をつれてきててもかまいませんよ。」

「いいえ、王子私もあなたにお聞きしたいことがあります。」

「为什么呢？」

「大声では言えないので後程。」

「わかりました。朝ご飯は僕の部屋で取りましょう。」

「え！？」

「手を出したいところですが……我慢いたしましょう。」

「ありがとうございます。王子。」

「あなたから感謝の言葉が聞けるとは……意外だなあ！」

王子は大袈裟に驚いて見せた。

「さあこちらへ。」

王子の部屋へ招かれ、食事を済ませると一呼吸おいてからフアーラは口を開いた。

「いきなり本題ですが……この国は不思議な点が多すぎます。なぜ民達はあれほどまでに貧困にあえいでいるのですか？あれではとれる税もとれないのでは？」

「この城が一つの国なのです。外部など知りません。」

「冷酷ですね。そんなに冷酷で反乱軍が来たことはなかったのですか？」

「ありましたよ。他国から一度だけ。けれどタイナーナの圧倒的権力の前に反乱軍も歯が立ちませんでした。」

「兵がこんなにも少ないのに権力で勝った……？おかしくはありませんか？なぜ兵がないのに勝てるのですか？」

「そんな事を話ながらふつと先ほど王子に食事に誘われている間静かにナハスが怒っている顔を思い出した。」

「この国は不思議な権力で守られています。兵達がきたからとて城に入れるはずはありません。それより僕はあなたと二人きりなのだから素ではなしたいなあ。」

「どうぞ。」

「あなたもですよ。」

「しかし、私の言葉遣いはあまりにも粗野で野蛮だと言われましたよ。」

「俺は君の本心が知りたいんだよ。」

「それに言葉遣いは関係ないのでは？」

「あるね。君はある一定の人にしか使わない言葉がある。俺には心を許してくれてない証拠じゃない？」

「ブレットチアは席を達、ファアラのところまでくると耳元でつぶやいた。」

「ゾクリとして一瞬身を縮めるがすぐに元に戻った。」

「王子、あなたのことはこれでも、嫌いではないのですよ？」

「でも好きではないだろう？」

「いいえ、好きですよ？野蛮なだけかと思いましたがあれ以来ちゃんと約束も守っていただいていようですし。」

「それは君の近くににいる二人より？」

「……それは……ごめんなさい。違っけれど……」

ブアレツチア王子は恋をしたことがあるんだろうか。
急にそんな事が気になった。

ブアレツチアはため息を吐き、ファアラを椅子の背もたれごと抱き
締めた。

「もう少し自分は魅力的な男だと思っていたよ。」

「ブアレツチア王子？」

「なんだい？」

「王子は……恋をしたことがありますか？」

「……君にしているじゃないか。」

「私はゲームでしょうか？楽しい感覚を勘違いなさってるのでは？」

「そういう君は？」

「……ないんです。だからたった一人を見つめ、たった一人
を選んで愛することは私にはわからない……。」

「……それは俺にもないなあ。なんせ一人を選ぶ意味がわ
らないし。よし。君の初恋相手に俺はなってやるぞ！」

そういつてファアラから手が離れた。

「つまり……それは……王子の初恋相手に私にな
るということでもありますよね？」

「そうだ。」

「似たもの同士なのかも知れませんが。私と王子は。」

椅子から立ち上がり、クスリとファアラは笑ってから「ごちそうさま
でしたと付け加えた。

すると。ブアレツチア王子に抱き締められた。

「王子!？」

「あ、すまない。だけど……何もしないから……
しばらくこのままではダメか？」

しばらくの間、沈黙が続き、ブアレツチアが離れた。

「初めて俺の前で笑ったね。」

「それはあまりにも根拠のないことを自信満々に王子が言い切っ
てみせるから……。」

またクスクスとファアラは笑った。
喉からクツクツと音が漏れる。

「なんだろうね。君だけだよ。抱き締めても手を出さないのは……
……いや、抱き締めるだけでも十分だと思っただのは……
君が俺の正妻になっただら俺は君の尻にひかれそうだな。」

「私は妻になる気は……。」

「それはこれからの楽しみだな。」

無理やりファアラの話に割り込み、ファアラの唇に人差し指をあてた。

「ん。」

ファアラはすこしびくりとして身を退いた。

「何もしないよ……今は……ね。」

そういつて人差し指を自分の唇にあてた。

「そ、そんなことより案内してただけませんか？王様方直々の寝室があるこちらの塔には近付けられるものが限られているとききました。」

「構わないよ。デートならね。」

「は……デート！？たかが城内を散歩するだけですか！？」

「立派なデートだよ。」

「王子……王子のことは嫌いではありませんがそんなデートなど……。」

「嫌いじゃないってのは好きってことかい？」

「おたわむれはおよろください。」

「たわむれちゃいないさ、これで俺は君を落とすために本気なのだから。」

ブアレッチアが近づいてきてファアラを壁におしやっただのでファアラは顔をあげた。

そこにはブアレッチアの瞳があり、その瞳は光を宿していた。

目が……本気だと言っている。

目が……冗談では済まないと語っている。
目のなかの光が痛いくらい鋭い……。

狙われし姫君2

「あ……………」

ファースは思わず顔をそらした。

少しだけ……………怖い。

男の目だ……………ナハスもたまに見せることがある獲物を狙う

“獣の目”……………。

「何で目を逸らすのかな？そんなんじゃ、無防備すぎて簡単に侵入できちゃうよ？」

ブアレッチアはファースの首筋を指でなぞった。

「いや！」

ブアレッチアの手をファースは勢い良く振り払った。

「身の上の安全を確保していただいたんでしたよね？」

「ええ、もちろん。だけど近づくと言われたわけではないし、今のも少し挑発しただけです。」

「挑発!？」

「しかたないでしょう。俺はあなたに近づきたくてウズウズしてるんですから。」

確かに……………この王子のクセは自分を偽るとき話し方を変える。

さっきの挑発のセリフもそうだった。

つまり、挑発なんかじゃなかった。

本気が……………入っていた。

私は……………狙われていたのだ。

「どうして……………私なのです。」

「未知なる物だから。前にも言ったでしょう？俺に齒向かうものはいない。それに君は不思議な人だ。心を許せる偉大な存在だ。」

「……………私は王子に好かれるようなことをしたおぼえはないのですが……………」

「君は知らないだろうね。俺に心を開いていいといったのは君だつてこと。昔、タイナーナは一度かなり弱ったことが合った。俺はユリアや様々な国を旅しながら各国に力を貸してくれるように頼んでいた。ユリアには君がいて君は俺を城のそこから連れ出してくれたことがあった。その時に俺の心は自然に君に開いていた。君が俺の妻候補となると聞いたときは嬉しかったんだ。でもすっかり心は閉ざされて君にあつても憎まれ口しかたたけなくなっていた。俺はこんなに変わってしまったのに君は変わっていないかった。嬉しかった。再び君は俺の前にいる。ただ、それだけのことだけだ。」

小さい頃、王の血を引きながらにして窮屈な生活を送っている王子を見つけた。

誰もいない部屋の片隅でうずくまるようにして膝を抱える王子が私にはセタルのようできのどくでならなかったから王子を無理やり城外へと連れ出した。

王子は笑顔を取り戻したけど王子が別の国へ渡ったあと私はとても怒られたことを覚えている。

「ええ!? ええええ!? 嘘、あの時の王子が……ブアレッチア王子……!?!」

「そう。」

「だってあの時はまだ子供で……顔も、国も覚えてなくて……そんな……あの寂しそうな王子が……でも王の子なら王子じゃなかったって旅はできたんじゃないんですか?」

「俺は弟だからね。兄が病弱じゃなきゃ兄がいくはずだったのさ。」

「お兄様は……?」

「だいぶ前に亡くなったよ。俺たちと同じ年だった。」

「……ごめんなさい。」

「別に。昔のこと、よく覚えてたな。」

「ええ、お父様に怒られましたから。」

「君も俺も同じだな。王の話をするたびに寂しそうな顔をする。他

人から見たら羨ましがられる対象のはずなのに……不思議だ。」

「そう……?」

そしてファアラが顔をあげるとブアレツチアがキスをしてきた。ゾクリとする。なんか、嫌だ。

ファアラはブアレツチアを押し退けると部屋を跳びだした。

口をふきながら罪悪感を感じていた。

まえにナハスにされたときはいやじゃなかったのに。

「ファアラ!」

「あ……ナハス……」

今、一番見たくない顔だ……。

「何で顔そらすんだよ?」

私……私は……キスを……した。

ナハスに……お前に見られたくはない……ことを……してきた。

今は……私の顔を見ないでくれ。

自分で自分がわからなくなってきたから。

「や、めろ。」

「は?」

「やめてくれ!」

ナハスはそれでも無理やりファアラを見た。

ファアラの顔は歪んでいた。

ただ、手で唇をこしこすっているところに目を付けた。

「……キス……したのか。王子と。」

「あ……」

だから嫌だったのに。

また、ナハスに悲しそうな顔を私はさせている。

「よかつたな。」

よかつた……?どうということだよ?

「それは……王子の妻に近づいてきてよかつたと言いたい

のか？」

口が震える……心臓が……苦しい。

「ああ。」

「よく……わかった。ナハスなんか嫌いだ！だいつきらいだ！」

そういつてファーストは走りだした。

なぜ私はここまでムキになってるんだろう。

バカみたいだ。本当はきらいなんかじゃないくせに偽りをかたつて勝手に怒鳴って……そして逃げた。

空間と時間のゆがみ

旅芸人は王達を楽しませ、占い師は王の機嫌をとっていた。

占い師は男で髪が長く、負か緑色のストリートヘアだった。

ひとしきり王達を満足させたあと、旅芸人達は各部屋を用意され、休むことになった。

フアーラは占い師の部屋を尋ねることにした。

コンコン。

「はい。」

「お聞きしたいことがあります。入ってもよろしいかしら？」

「どうぞ。」

フアーラは占い師の部屋へと入った。

「こんばんは。何用でしょう？」

「あなたはただの人間ではありませんね。」

「なぜそう思うのです？」

「この城に入れる異性は少ないのです。それがたとえ占い師でも・

・

「では旅芸人達はどうなるのでしょうか？」

「彼らは団体です。単体で入ってこれたのは何故ですか？」

「団体のほうが単体より厄介ではありませんかね？」

「まさか。団体なら割り当てた一つの部屋を見張ればいいにすぎません。ですが、一人用の部屋には見張りが見つからない、もしくはつきにくいんです。王が娘たちの部屋を訪れたとき、誰かに除かれていては嫌だからでしょうね。っと、こんな無駄話をしにきたのではありません。この城に入るとき何か感じませんでしたか？」

「・・・・あなたはまだのお嬢さんではないんですね。城にいなながら異変に気付きつつある。そうですか。私は魔術師です。占いもできますが・・・・それ以外も。あなたは異変に気付く才能があるのでしょうかね。」

「それで？何を感じました？」

「強大な力です。城の外には決壊が張られていました。時空をねじまげ、消して城に近付けぬ用にする謎界へと続く決壊が……」

「謎界？」

「城に近付いているはずなのにその場所に戻るように仕掛けられている歪んだ道、簡単に言うとも迷路ですよ。」

「それ以外は？」

「2つ感じます。決壊以外にも強い力を。1つは王自身。強大な力ゆえ、まがまがしかつたです。元が王の力ではないぶん、このままだと城は危険です。」

「あなた、先ほど王の前で何事もうまくいくと言っていましたよね？」

「社交辞令ですよ。なにしろあの王様、短気じゃないですか。」

「あなたには未来が見えているんですか？」

「ええ、少しだけ。魔術と言っても僕のはあまり役に立たない先見の能力ですからね。」

「先見？」

「未来余地能力です。」

「だから占い師を……」

「ええ。」

「未来に何が見えますか？」

「1つは城が崩れる未来、すべての軸がおかしくなる未来ですね。」

もう1つも城が崩れる未来ですが、こちらは軸が守られ、タイナーナ以外を巻き込むことはない未来です。その未来は……なんと……驚きですね。あなたの手にかかっています。どうやらあなたは世界を救う戦士のようだ。そして戦士は異世界を渡り、異次元を旅する戦士たちを呼ぶ。その懸け橋になるのは僕と……あなたに近い人……？どうやら戦士は近い未来に立ち上がるようですね。」

「私……異次元の人を呼び寄せるとすごい芸当は持っているよ？」

「だから僕が教えなければならぬ……ってことでしょうか？」

「占いはニコリと笑い、夢渡というものを教えてくれた。」

「先見の能力を持ってして未来に起こることをフーラに教えつつ、結果はなかなか教えてくれない。」

「結果は未来を変える、干渉しすぎるとこれもまた世界の軸を変えてしまうのだと……すべてのものには軸があり、その軸には時間が宿っている、未来を変えることは現在に出会ってなければならなかった出会いを潰す事。偶然に出会ったように見えても人間には人間の関係性がある。と難しく教えてくれた。」

「まあ、簡単に言っちゃうとですね、僕もあなたも出会わなかったかも知れないってことですね。」

「干渉しすぎると……軸が曲がると言っていましたね。つまりそれは、具体的にどのような事が起こるのですか？」

「そうですね、あなたが今やろうとしていることは確立が二分の一。成功するか、しないか。成功したとするとあなたが呼び寄せた仲間とは異次元を旅する人たちですから、世界が無くなるか、国が滅びるかするでしょうね。でもそうでもしないかぎり、国はこの世界では無いものの力によりどんどん軸がずれてしまうでしょう。もしかしたら同じ国でも軸がずれて別の世界を生み出すこともあるかもしれませんね。でもそれはそれで新しい意味を持った世界ですから、そこまで怖がる必要はありませんよ。」

「潰れ、消えるか崩れ、生まれるか……？」

「そう考えてもらってもかまいませんよ？ただ、消えるというのはこの世界が消えるということですからねえ。僕達の存在全てが消えてしまうでしょうね。」

「タイナーナの力が……世界を消す……？そんなに大規模な力を持っているのですか？世界規模になるほどの力を……」

か。ナハスは今まで以上に体付きがたくましくなり、筋肉ムキムキではないがまさしく男という感じになっていた。それぞれがそれぞれの大人の体付きになっていた。ホルモンバランスのとれる年齢は見るものを魅了させる。占い師は若かった外見からは少し老い、だんだんとしわがよってき
ていた。
そこへ見知らぬ四人が降り立った。

空間と時間のゆがみ（後書き）

この小説は『記憶』というファンタジー小説とつながっています。これから少し、わけのわからなくなるところがさらに増えるかもしれませんが、どうしても納得のいかない場合は『記憶』 83あたりからつながっていますのでご覧になってみてください。

最終話

「だ、誰だそなた達は。」

フアーラは驚いて思わず声を上げた。

「本当にカルナさんそっくりだねー。」

「にしちゃあこっちのが大人っぽくないか？」

「そんなことよりこの空間はおかしいのでは？まわりの方々がどんどん歳をとっていかれます。」

「……おまえ達が私が呼んだ……戦士？」

「え？やだなあ。戦士なんて大それたものはしてないよ。」

と会話を交わし、四人は王が持つ力よりも強くさつさと三枚のカードにするといなくなってしまった。

四人の名前はルルス、メイア、ミオンハク、セタだと知った。

強大な力を失ったタイナーナの城は時の流れにより崩壊。

またその奇跡の四人とフアーラ達を人々は像にして代々残し続けることになった。

像の意味は“願うだけでは得られない。すべては実行なのだ”とか……。

その像を見ながらフアーラはつぶやいた。

「あのミオンハクとか言うの……ナハスに似てたな……

・あんな切なそうで寂しそうな顔を私は今までナハスにさせていたのかな。」

四人がその力を体内に宿したとき、フアーラ達の魔法もとけ、メイドも元の姿に戻った。

ただ、あの牢獄で死んでいった人たちは帰っては来なかった。

そして少女たちは大人になった。

「フアーラ！」

「ナハス！あの、あのな。私……わかったかもしれない。」
「何が？」

「こ……ムグッ！」

ファアラが言い掛けたとたんに後ろからブアレッチアがファアラの口を押さえた。

「こんなところで……しかもよりによってこんな奴と逢引きだなんて心外だなあ……。」

「何を言っている！タイナーナからユリアに来るといったのはおまえだろう！しかもタイナーナには今は国王がいないし？国民たちも平和にすごしているそうじゃないか。」

「そうだね。」

ファアラの顔をくいつと斜めに持ち上げるとブアレッチアはファアラにキスをした。

「な、何をする！」

ファアラはブアレッチアを突き飛ばした。

「やだなあ。いつものことじゃないか。」

「ああ、本当にいつもいいつも手口をかえて私が抵抗する隙も与えてはくれないよな！しかも……いつもナハスの前でするし……と、とにかく私に近づくな！」

するとナハスはファアラを抱き寄せてキスをし、ファアラが見えないところでアツカンベーとしていた。

「な、ナハス！わ、私は物じゃないんだぞ！？き、キスは特別な行動だと聞いたから……そんな物にマーキングするようなことは……。」

「嫌ならあいつみたいにつきはなしいだろ。」

「え！いや……その。たまたまだ！」

顔を真っ赤にして頭をふるファアラ。

そんなファアラをナハスは見てニヤリと笑った。

「ファアラちゃんは俺のことが好きなんでちゅねー？」

「……っ！す、すきだよ！悪いか！」

びつくりしてナハスもブアレッチアも身を固める。

「ナハスも、カリアもブアレッチアもみんなすきだよ！」

ブアレツチアは吹き出しナハスは呆れた。

「あんね、そーいうんじゃないよ。」

「……………そうさ、私はみんな好きだ……………でも、なん
だろ……………この気持ち……………ま、いつか。」

そうやって少しずつ気持ちは変わっていく。

その先に何かあるのかは、解らないけれど……………。

最終話（後書き）

読んでくださった方々、ありがとうございました。

戦いがどうなったのか知りたいという方は『記憶』の83〜99話を
をご覧ください。

記憶は戦いが主となっているファンタジー小説ですのでご注意ください。
さい。

（グロテスクな描写場面などが無理というかたは見ないほうが良い
かもしれません。）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3365i/>

その先に

2010年10月21日21時55分発行